

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2026 graph magazine vol. **68**

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. **68** 定価100円(税込み)

Unser
HERR
lebt
主は生きておられる

主は生きておられる
Unser HERR lebt

福音メッセージ

- 4 信仰の原点に戻ろう ゴットホルド・ベック
18 私たちにとって大切なこと 兵藤 勝義

6人の証し

- 28 主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな 城倉 徳子
39 我が家に聖書がやって来た 大石 道男
48 御子をさえ惜しまずに死に渡された神の恵み 平良 久美子
57 主のあわれみは尽きない 小笹 靖
66 ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、
わたしもその中にいるからです 池田あかね
74 今あることはすべて、主の恵み 山田 渉

福音メッセージ

- 85 生ける神のしもべダニエル(2) ゴットホルド・ベック

信仰の原点に戻ろう

ゴットホルド・ベック

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは
初めの愛から離れてしまった。
(黙示2・4)

見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわ
ざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。

(黙示22・12)

ヨハネの黙示録22章12節は、主イエス様の信者への
呼びかけです。主は「わたしの報いを携えて来る」と呼び
かけておられます。主は聖徒たちを迎えに来るだけで
はなく、報いるために再臨なさると、ここではっきり言
われています。

パウロのために用意されている義の栄冠は主が与え
てくださる報いです。またパウロだけではなく、主の現
われ、主の再臨を慕っている者は誰でも報いられると、
聖書を通してはっきり知ることができるのではないで
しょうか。黙示録2章10節でイエス様は約束しておら
れます。

死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたし
はあなたにいのちの冠を与えよう。
(黙示2・10)

主の再臨を慕う人々とは、もちろん現在も、霊とまこ
とをもって主を礼拝する人々でしょう。アモスという
預言者は、当時のイスラエルの民に彼らの捧げる礼拝
について、主のことは次のように伝えました。

わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなた
がたのきよめの集会のときのかおりも、わたしは、かぎ
たくない。

信仰の原点に戻ろう

では、どういう人々がイエス様から報いを得られる
のでしょうか。主を愛し「私はイエス様が大好きです」
と言える人は幸せです。必ず報いられるからです。その
人々は心から主の再臨を待ち望んでいるはずで、パ
ウロは殉教の死を遂げる前に次のように言いました。

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰
を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために
用意されているだけです。かの日には、正しい審判者で
ある主が、それを私に授けてくださるのです。私だけで
なく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授け
てくださるのです。
(2テモテ4・7、8)

たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささ
げ物をわたしにささげても、わたしはこれらを喜ばな
い。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目
もくれない。あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざ
けよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。

(アモス5・21～23)

これを読むと、心から喜んで主を礼拝することがで
きなれば、主がどう判断されるかは明らかです。「あ
なたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ」と言われる
のです。

まことの礼拝とは、主に對する愛の現われです。イエ
ス様は再び来られます。間もなく来られます。そのとき
イエス様の切なる願いが聞き届けられるのです。ヨハ
ネの福音書17章にイエス様の祈りが書かれています。

父よ。願います。あなたがわたしに下さったもの
をわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてくださ

い。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

(ヨハネ 17・24)

世が造られる前、はるか永遠の昔、イエス様は父なる神の愛の対象でした。愛の対象であるイエス様は父から与えられた素晴らしいプレゼント、考えられない栄光をお持ちになったのです。そしてイエス様は、私たちをもこの栄光にあずからせたいと心から望んでおられます。

エペソの兄弟姉妹たち

「わたしは報いを携えて来る」とイエス様は呼びかけられます。ヨハネの黙示録2章には、エペソにある教会の兄弟姉妹に向けられた主のことばがあります。エペソという言葉は、「愛している者」、「愛されている者」を意味しています。エペソにいる兄弟姉妹は、イエ

ス様に愛されていると確信したから、それに応えてイエス様を心から愛するようになったのです。エペソ人への手紙5章25節には次のように記されています。

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた：

(エペソ 5・25)

イエス様の愛の現れとは、ご自身の犠牲です。「わたしは喜んで犠牲を払うだけではなく、喜んで犠牲になる。わたしは無視されても、呪われても、罪のかたまりとされたとしても構わない。人間がわたしの栄光にあずかるようになるのであれば、わたしは喜ぶ」。これがイエス様の絶えざる願いなのです。

聖書の中でイエス様はいろいろなことを話されています。そのおもな目的は教えるためではなく、ご自身を明らかになさることでした。聖書とはひとつの教えの本ではありません。ひとつの教科書でもありません。「主ご自身の啓示そのもの」です。「わたしは、〇〇であ

る」という表現がよく出てきます。それはすべてイエス様の啓示そのものです。「わたしはいのちのパンです」「わたしは世の光です」「わたしは天国に続く唯一の門です」「わたしはよみがえりです。いのちです」「わたしは道です。真理です。」とイエス様は言われたのです。それらは何かを明らかにするためというよりも、ご自身を啓示するためです。そして黙示録2章においても、同様に「わたし」ということばが繰り返し出てきます。

2節に「わたしはあなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている」とあります。すなわちイエス様の目は炎のようであって、すべてのものを見通します。

4節にも「あなたには(わたしが)非難すべきことがある」とあります。イエス様はこの場合に両刃の剣のよう

に厳しいことばでもって、彼らに対する判断を下しています。

5節にも「わたしは、…あなたの燭台をその置かれたところから取りはずしてしまおう」。イエス様は人の表面ではなく内面をご覧になり、信者でさえも同じように

さばかれるのです。この言葉は非常に厳しいものです。イエス様は約束を実行するお方というだけではなく、さばきの預言をも実行されるお方です。

7節にもう一回、「わたし」ということばが出てきます。「わたしは、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう」。このことばの中に、主イエス様の絶対的な權威を見ることができます。すなわち、永遠のいのちを与えることができるのは、イエス様しかおられません。

もし私たちが、イエス様のこの「わたし」ということばに注意を払うならば、イエス様の偉大さ、そしてすべてのものがイエス様の手中にあることを知ることができるでしょう。イエス様のみことばとは真理そのものです。イエス様のなさる判断は正しい判断です。

このエペソにいる兄弟姉妹とは、どのようにして救われたのでしょうか。パウロはエペソ人への手紙の中で彼らに次のように書いています。よく引用されるすばらしい箇所です。

信仰の原点に戻ろう

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることをないためです。

(エペソ2・9)

ここに書かれているように、彼らは神からの賜物としての恵みと信仰により救われたのです。救いはイエス様からのすばらしいプレゼントです。ですから、天国へ行って誰も誇ることはできません。「私は真面目に聖書を読んだから」、「私はよく集会に出たから」云々と、誰一人言えないのです。全部が主の恵みです。イエス様の救いとは、人間の働きがなくても、人間のいさおしがなくとも、ただ「恵み」として主によって与えられるものです。イエス様の救いは、悔い改めをするすべての罪人に賜物として、贈り物として与えられるものです。

エペソの人々は、このようにして主の恵みによって救われ、受け入れられ、主の愛のゆえに自分の罪は赦されたと経験しました。イエス様がエペソの信者たちの

罪を拭い去り、彼らの過去を清算してくださっただけではなく、彼らは御霊により本当に変えられるようになったのです。彼らは生ける望みを持つ者、神の作品となったのです。

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。

(エペソ2・10)

このことをエペソにいる兄弟姉妹はよく知っていました。私たちもこのことを知っているのでしょいか。イエス様は私たちを救ってくださり、新しい生活を送るために、聖霊を大いなる力としてお与えになりました。けれども主は、新しい生活が私たちの間で実現しているかどうかを見ようとしておられます。イエス様は、私たちの生活の中に実を求めておられるということです。私たちは実を結ぶために選ばれたのです。

エペソの兄弟姉妹は多くの恵みを与えられました。

び、疲れたことがなかった。(黙示2・2、3)

そしてイエス様は言われました。「すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。」(ルカ12・48)と。エペソにいる兄弟姉妹について聖書が言っていることは、彼らには主のご計画のすべてが、あますところなく知らされたということです。その結果として、エペソの信ずる者の群れは本当にすばらしいものとなったのです。

エペソの兄弟姉妹への称賛

ヨハネの黙示録2章では、エペソの信徒のことが次のように主に称賛されています。

わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍

イエス様には彼らの行ないがよく分かっていました。また、彼らが努力し、力を尽くし、自分を犠牲にしたことをイエス様は認めておられました。彼らは困難なときに耐え忍び、イエス様の御名のために苦しみを耐え忍んだのです。そしてさらにほめておられます。彼らは霊を見分けることができたのです。使徒と自称している人たちが、実は偽り者で悪い人々であることを見抜いて、彼らを群れから追放してしまったのです。

またその当時、エペソの信者の群れにも信仰の弱い人々がいたでしょうが、彼らはその人たちを耐え忍び祈りました。つまり彼らはひとつだったのです。一人が悩めばみな一緒に悩みました。いわゆる、単に気の合う者たちの「仲良し会」ではなかったのです。

そして、彼らは疲れることがありませんでした。彼らは生ける主イエス様の内にある隠された力の源を知っていたからです。自分たちの力に頼ることをしないで、

信仰の原点に戻ろう

意識してイエス様により頼んだのです。イエス様を伝えること以外には、何ごともなすことができなかったと言えます。「私たちにとってイエス様はすべてです。イエス様から離ればもう生きられない」と、彼らはそういう心の態度を持っていたのです。ですから勇気を無くすこともなかったのです。迫害もあざけりも彼らは問題にしなかったのです。ただ「イエス様のために生きたい」と願っていました。

それから6節を見ると、もうひとつほめられています。「あなたにはこのことがある。あなたは三コライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。」と。彼らは人間を憎むべきではないことがわかっていたのです。主は罪人を心から愛しているけれども、人間のわがまま、罪の行いは徹底的に憎み、絶対に赦さないお方です。エペソにいる兄弟姉妹は、本当に主の最高の称賛を与えられたのです。

これらの主のことばを聞いたとき、彼らは嬉しくなったことでしょう。主によってほめられるのは最高で

してしまおう。

(黙示2・5)

エペソの集会がもし光を放つことができなくなれば、もはや何の値打ちもない、価値のないものになります。したがって主から捨てられてしまうだけです。歴史は、私たちにエペソの集会が主によってまったく見捨てられてしまったことを教えています。あれほど称賛された集会が、跡形もなく消えてしまいました。彼らが悔い改めなかったからです。

私たちは次のことをエペソの信ずる者の群れから学ぶことができます。私たちはすべてのものを自分のものとして持つことができます。例えばエペソの集会が持っていたように、非難することのできない働きや、正しい聖書の教え、殉教に対する備えなどを持つことができます。けれども、それらすべてのものにも関わらず、私たちはもっとも大切なことを見失って、もはや燭台としての働きをなすことができなくなり、さまよい出てしまふ、ということもあり得るのです。

信仰の原点に戻ろう

はないでしょうか。けれども悲しむべきことに、このエペソの信ずる者の群れも主による非難を受けなければならなかったのです。

エペソの兄弟姉妹への非難

イエス様は「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」(4節)と言われたのです。「信仰の原点に戻らないと大問題だよ。絶対に報いられることはない」と。彼らに対して一八〇度悔い改めることを呼びかけておられたのです。もし悔い改めなければ、そこにある燭台を取り除けられると警告を与えられたのです。

あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしないさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行つて、あなたの燭台をその置かれた所から取りはず

というのは、エペソの信ずる者の群れは、初めの愛を失ってしまったのです。結局「私は、イエス様が大好きです」という心の態度が知らないうちに消えてしまったのです。

初めの愛

初めの愛とは一体何なのでしょう。初めの愛というのは、イエス様との交わりです。イエス様なしには何ごとも望まず、何ごともなし得ないということ。す。「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」(ヨハネ15・5)と主イエス様は言われました。つまり初めの愛がなければ、人間が何をやっても主は受け入れられないのです。

主のみことばが私たちの力、喜び、希望の泉となれば大丈夫です。毎日、「主よ。お話ください。しもべは聞いております」(1サムエル3・9)という態度で絶えずいるならば、主はあふれるばかりの祝福を与えてくださるの

です。

初めの愛こそが、主にとってすべてなのではないでしょうか。これが燭台がその場に置かれていることの大切な条件です。けれどもエペソの兄弟姉妹の心は、イエス様との親しい交わりの中に居続けることができなかったのです。その結果イエス様は、「もはやわたしはあなたとともにいることができない。わたしはあなたに対して対立する」と言わざるを得なかったのです。こうなると、人間は何をやっても無駄なのではないでしょうか。的外れなのではないでしょうか。

主は人の行ない、あるいは歩みを見られるよりも、心を見てくださるのです。箴言23章26節には「わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ。あなたの目は、わたしの道を見守れ」とあります。結局心が問題なのです。外面的に見るとエペソの集会はすべてがうまく行っているように見えた。けれども主は悲しまれました。満足をされていなかったのです。確かにエペソの集会には熱心さがありました。困難に対する忍耐がありました。けれども、

イエス様に対する個人的な愛がなければ、いかなる熱心も、いかなる奉仕も何の役にも立ちません。同じコリント人への第一の手紙に、パウロは当時の人々に「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ」(1コリント16・22)と書いたのです。大変に厳しいことばです。この意味は、主を愛さない者は祝福されない、証しにもならない、用いられ得ないということです。そうであれば何をやるでも無駄なのではないでしょうか。

イエス様は私たちに対しても、ペテロに聞かれたように問われるのではないのでしょうか。「あなたはわたしを愛しますか？」と。ペテロは「主よ。あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります」と言えたのです。そう言えたのはイエス様を三回裏切ってしまった後からです。その前にも言葉で言うことはできたとしても、心から言うことはできなかったでしょう。大いに愛され、多くの罪が赦されていることの結果が、大いに愛することなのではないでしょうか。

信仰の原点に戻ろう

これらのものも初めの愛、イエス様に対する献身の代わりになるものではなかったのです。

初めの愛のひとつの表われとは、「主よ。語ってください。しもべは聞いております」「私の思いではなく、みこころだけがなるように」という態度を取ることです。聖書全体の言わんとしていることは、信じる者にとってもっとも大切なのは、主に対する愛だということです。主に対する純粋な愛です。そのほかのすべての事柄は第二次的な意味しか持ちません。いわゆる、「愛の書」と呼ばれているコリント人への手紙第一の13章を見ると次のような箇所があります。

また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。

(1コリント13・3)

パウロも本当に、イエス様を心から愛したのです。なぜなら、「私は罪人のかしらである」と心から言えたからです。

初めの愛を持たない信者は、火の消えた灯ともしびのようなものです。このような人は主のために何の価値もなく、何の役にも立たない者です。(本当の意味でイエス様を信じる人々は、もちろんイエス様を心から愛しているのではないのでしょうか。)イエス様の時代、多くの人々が一度はイエス様のことを認め、そしてイエス様に従うようになりましたが、結局、大部分は離れてしまったのです。ヨハネの福音書6章を見ると次のように書かれています。

そこで、弟子たちのうちの多くの者が、これを聞いて言った。「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか。」…そしてイエスは言われた。「それだから、わたしはあなたがたに、『父のみこころによるのではないが、だれもわたしのところに来ることは

できない。』と言ったのです。』こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエスとともに歩かなかった。(ヨハネ 6・60、65、66)

これは弟子たちとイエス様との会話です。弟子たちの多くの者がもはやイエス様とともに歩かなかったというのは、結局彼らがイエス様を心から愛さない者たちだったということです。イエス様はそういう人々をもちろん用いることができません。偽り者は離れたほうがいいと、イエス様は悲しみながら思ったに違いありません。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。

(ヨハネ 15・5)

主に頼れば、主とつながっていれば、みな例外なく多

くの実を結びます。けれども、もしそうでなければ、いわゆる信仰生活とは的外れのものになります。主は言われます。

だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまっています。

(ヨハネ 15・6)

もし、主とつながっていなければ、実ではなくて、残るのは灰にすぎません。パウロ自身も、誰でもこの危険性を持つ者であると分かったので、次のように告白したのです。『私は自分の体を打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです』(1コリント 9・27)と。

それでは報いられるためにどういう態度を取るべきなのでしょう。パウロは答えとして、コリント人への

手紙第二の中で次のように書いたのです。

確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。(2コリント 5・7)

パウロの言う「信仰によって歩む」とは一体どういうことなのでしょう。目に見える現実によって動かされないことではないでしょうか。みことばにだけ頼ることではないでしょうか。

ある姉妹は、ご主人が家を出てしまったのです。彼女と子ども二人を残してです。その彼女がこの間、次のように書いた手紙をくれました。「この頃は、できるだけたくさんイエス様からの喜びをいただこうと、聖書をいつもテーブルの上に置き、座るたびに開いて、みことばを食べています。私はイエス様が大好きです」と。信仰によって歩むとはそういうことなのです。目に見える現実についてだけ考えていると、自分に同情し、自己

憐憫に陥ったりして、落ち込んでしまいます。みことばを通して元気になることが主の願いです。初代教会の人々はこの態度を取ったのです。

確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。(2コリント 5・7、8)

どんなに苦しい状況に置かれていてもイエス様を信じ信仰によって歩む者は、結果としていつも心強いのです。

そういうわけで、肉体の中にあると、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。(2コリント 5・9)

主に喜んでいただきたいとの思いは「初めの愛」の表

信仰の原点に戻ろう

われです。これは報いを受けるために必要です。ですから10節に書かれています。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。

(2コリント5・10)

主は報いをもつて来られます。主は報いを与えたくて、与えたくて仕方がないのです。私たちに与えて大切なのは、主を喜ばせたいという願いを持つことです。大切なのは主の前に静まることです。主のもとで静かな時間をもつことによって、私たちに新たな愛が回復せられ、主との交わりが私たちの新しい喜びとなるのです。ですからイエス様との交わりのときを持つようにしてください。イエス様に語ってもらうときを持つってください。イエス様にあなたの恥を見ていただくようにしてください。そうすることによって、罪の赦しを体

ないからです。

今日こそ、あなたが盛んになり、私は衰えるべきです。私ではなく、栄光をあなたの御名にのみ帰してください。自分のために何も欲しがらないように、お助けになってください。すべてのすべてを祈りの課題にする恵みをお与えになってください。

私は自分の悟りに頼ることを恐れ、また、心配しています。この目に見える世界は私にとって魅力のないものとなり、人にほめられなくても良い、誤解され、批判されても良いという心構えを持つことができるように、ひたすら心からあなた様だけを喜ばせたいという願いを持つことができますように。

あらゆる悪口から私を守ってください。私の話す言葉が人々の励ましとなり、勇気を与えるものとなるように。どうか悩んでいる人々のところに私を導いてください。あなた様のように、罪人の友となりますように。失われている人々のためにあわれみの涙を流す者になり、あらゆる無関心さから私を解放してください。与え

信仰の原点に戻ろう

験し主の恵みを驚くほどに得る者となり、主を心から礼拝するようになるのです。自分で考えて今日のために色々な計画を立てても、なかなか思いどおりに行きません。自分で考えるよりも、代わりに祈ったほうが良いのではないのでしょうか。なぜならば、祈りの結果として主は働いてくださるからです。

祈り

では私たちは一体何を祈ったら良いのでしょうか。

「主イエス様。私は今日、新たに自分自身をあなたにおさげいたします。御手の中にいる器として私をお用いになってください。あなた様だけが栄光をお受けになりますように。」

私を守ってください。罪を犯さないように、あなたを悲しませないように、御霊の言うことに対して絶えず聞く耳を持つように。何があっても、あなたとともに歩みたいのです。そうでないと全然、前進することができ

られているお金も自分勝手に使わず、あなた様ご自身が導いてくださいますように。

自分のからだは聖霊の宮であるという事実を絶えず覚え、この事実こそが私自身を根本的に変えてくださいますように。

今日があなた様の再臨の日となりますように。あなたの御顔を見、あなたの御前にひれ伏すことを心の底から憧れています。この幸いな希望によって、私があらゆる束縛から解放されますように。

もうちょっと、もしかすると今日かも知れません。私はあなたといっしょになることを待ち望んでいます。アーメン。主イエスよ。来てください。」

このように祈ることができれば幸いです。これこそが初めの愛のひとつの表われなのではないのでしょうか。

私たちにとって大切なこと



兵藤勝義
(吉祥寺キリスト集会)

私たちの心の奥底は満たされてはいません。私たちには本当の意味で頼るべきものがありません。もつと別の人生があるに違いない、人生とはこんなに空しいものであるはずがないと思っているのではないでしょうか。

創造主なる神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」(創世記1・26)と仰せられました。

創造主なる神は、私たち人間にご自身の属性である神の霊を吹き込まれ、私たち人間は神の霊と土地のちりから造られました。そのときエデンの園に置かれたはじめの人、アダムとエバは、自分自身の価値判断で何かを選択するなど、創造主なる神から独立した行為

くなってしまいました。神との交わりが絶たれ、神のサポート(助け)を完全に失いました。

そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間身身を隠した。神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」

(創世記3・8～10)

神との信頼関係を破った人間は、神との交わりから脱落しました。神が人間を見失ったわけではありません。神はいつも『あなたは、どこにいるのか』と私たち人間を求めておられます。

この神の呼びかけに答えることをしない霊的に死んだ私たちは、自分の思い、感情、意志を基準とし自分の力で生きていかなければならなくなりました。言わば

私たちにとって大切なこと

や生き方をする必要はなく、ただ神に信頼し、神に頼って生きていました。ただし、神はそのときにただ一つの約束を交わされました。それは「善悪の知識の木からは取って食ってはならない」(創世記2・17)というものでした。神と人間との信頼関係の確認として、このひとつの約束が交わされたのでした。しかし、人は欲望に駆られて神が食ってはならないと言われた善悪の知識の木の実を食べてしまうという罪を犯してしまいました。神との唯一の約束を破り、神との信頼関係を失いました。まるで私たちが神にでもなったかのように。

神への背きの罪の結果、私たち人間は霊的に死んだ者となってしまいました。創造主なる神が、私たち人間にご自身の属性として吹き込まれた神の霊が働かな

頭でつかちな存在として歩まなければならなくなりました。

「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない。」と。それゆえ、わたしは怒って誓った。「確かに彼らは、わたしの安息に、はいれない。」

(詩篇95・10、11)

罪を犯した人間の行為が歴史として積み重ねられ、世の中を作り上げていきました。その結果として、私たちの社会、そして私たち自身も色々な悩み、苦悩を抱え込むようになりました。

彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。

(エペソ4・18)

彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあが

めず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。（ローマ1・21〜23）

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。

（ローマ1・29〜31）

私たちはかたくなな心のゆえに、神のいのちから遠く離れ、自分の罪過と罪との中に死んでいました。そして、私たちには霊的な死だけでなく肉の死が待ち受けています。その死の瞬間には私たちは神に背く罪の償

に協議し、それから、主イエスを縛って連れ出し、総督ピラトに主イエスを引き渡しました。

だが、ピラトは言った。「あの人がどんな悪い事をしたというのか。」しかし、彼らはますます激しく「十字架につける。」と叫び続けた。そこでピラトは、自分では手の下しようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、群衆の目の前で水を取り寄せ、手を洗って、言った。「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」すると、民衆はみな答えて言った。「その人の血は、私たちや子どもたちの上にしかってほしい。」そこで、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。

（マタイ27・23〜26）

そのときすでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、三時まで続いた。太陽は光を失っていた。また、神殿の幕は真二つに裂けた。イエスは大声で叫ん

私たちにとって大切なこと

務だけをもって神の前に立たなければなりません。

恐れるな。人が富を得ても、その人の家の栄誉が増し加わっても。人は、死ぬとき、何一つ持って行くことができず、その栄誉も彼に従って下っては行かないのだ。彼が生きている間、自分を祝福できても、また、あなたが幸いな暮らしをしているために、人々があなたをほめたたえても。あなたは、自分の先祖の世代に行き、彼らは決して光を見ないであろう。人はその栄華の中にあっても、悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい。

（詩篇49・16〜20）

罪人となった私たち人間は創造主なる父なる神と和解する術を持っていません。直接、神の前に立つことができません。そこには父なる神と私たち人間との間の仲介者が必要です。それは唯一の救い主である主イエスです。

祭司長、民の長老たちは、主イエスを死刑にするため

で、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

（ルカ23・44〜46）

主イエスの死は、死を克服し、贖いを成就した、勝利の死でありました。

「神殿の幕は真二つに裂けた」との記述があります。この神殿の聖所と至聖所とを隔てる垂れ幕が真二つに裂けたということは、今まで大祭司だけが年に一度だけしか入ることを許されなかった至聖所、つまり聖なる神が臨在される場所へ今や主イエスの十字架での贖いを信じる者たちが、大胆に近づけるようになったことを意味しています。主イエスの死により、神と人との間に新しい道が開かれたことがわかります。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくだ

さったのです。

(ヘブル10・19、20)

神は、ひとり子、主イエスを十字架での身代りの死に向かわせました。主イエスは私たちの罪と裏切りのために十字架に向かわれました。それは、神がご自身の救いのご計画を成就させるためでした。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であつて、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至つてなされたあかしなのです。

(1テモテ2・5、6)

主イエスは罪を赦すことの出来るただ一人のお方です。

私たちは本来、神の栄光を現わす者として造られましたが、罪を犯したことによって、神の栄光を受けるにはふさわしくない者となつてしまいました。しかし、主

イエスの十字架上での贖いのみわざと、主イエスを信じる信仰によって、義が賜物として与えられ、神との正しい関係が再び構築されました。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

(ローマ10・9、10)

神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

(2コリント6・2)

主は言われます。今は恵みの時だから、神の和解の福音を、今受け入れるようにとです。神の和解の「福音」とは次のみことばにある通りです。

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

(コロサイ1・21、22)

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

(ローマ3・25、26)

主イエスの死、血によって、わたしたち罪人の罪が赦

私たちにとって大切なこと

され、神の怒りが和らげられ、静められました。

私たちにとって大切なことは、次の二つです。

第一に、自分が救われなければならない必要性を感じる。第二に、救われるには人間的な努力は必要ないこと、救いは神の恵みだけによることを知ることです。

一、自分が救われなければならない必要性を感じる

したがって、(キリストは)ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

(ヘブル7・25)

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの

水がわき出ます。」女はイエスに言った。「先生。私が渴くことがなく、もうここまできみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」 (ヨハネ4・13～15)

サマリヤの女は渴くことのない、永遠のいのちの水を求めました。神に対する人間の霊的な渴きをいやす水を求めました。心から主の救いを求めました。私たちが救いを受けるには、このサマリヤの女のように、まず求めることが必要であることがわかります。

救われるには、自分が救われなければならない必要性を感じる大切です。主イエスがこの世に来てくださったのは、罪人を招いて悔い改めに導くためでした。自分は罪人であり、救われたい、赦していただきたいと自覚している人々のために主イエスはこの世に来てくださったのです。自分は罪人であって、神の赦しを受けなければ平安がない、喜びがない、いのちがないと自覚している人、その人のために主イエスはこの世に来てくださったのです。

のです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることはないためです。 (エペソ2・4、5、8、9)

私たちにとって大切なことは、自分が救われなければならない必要性を感じることに、そして、みことばが示しているように、救われるには人間的な努力は必要ないことを知り、主の恵みを信じて求めることだと言えるのではないのでしょうか。

また、パウロは最も大切なこととしてコリントの人たちに次のような手紙を書き送りました。

私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから

私たちにとても大切なこと

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。 (マタイ7・7、8)

二、救われるには人間的な努力は必要ないこと、救いは神の恵みだけによる

神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるのです。

(2テモテ1・9)

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われた

十二弟子に現われたことです。

(1コリント15・3～5)

主イエスは十字架上で死なれた後、墓に葬られ、三日目によみがえられました。女たちが明け方早く、香料を持って墓に行くと、墓はすでに空っぽでした。途方に暮れている女たちに、ふたりの天使が主イエスの復活を告げます。その時、女たちは主イエスが、かつて語られたみことばを思い出します。

主イエスは息を吹き返して生き返ったのではなく、新しいからだによみがえられました。最初に主イエスの復活の事実を知らされた女たちは弟子たちに伝えましたが、彼らは信じませんでした。弟子たちは主イエスの生前にすでに復活の預言は聞いていましたが、この時点では、この知らせを戯言ざれごととは思えなかったのです。このような中であって、主イエスご自分から「復活の主」である姿を現わす必要がありました。

これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真中に立たれた。彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。すると、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がつているので、イエスは、「ここに何か食べ物がありませんか。」と言われた。それで、焼いた魚を一切れ差し上げると、イエスは、彼らの前で、それを取って召し上がった。

(ルカ 24・36～43)

そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えら

れる。あなたがたは、これらのことの証人です。さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

(ルカ 24・45～49)

この箇所は復活された主イエスが天にあげられる前に弟子たちに語った場面です。父からの約束の聖霊が下ること、弟子たちは心開かれ、十字架と復活の意味を理解することができるようになるということです。

主イエスが天にあげられてからは、父が主イエスの名によって遣わしてくださる聖霊が、弟子たちの力の源泉となり、真理の導き手となってくださいます。主イエスがこの地上で十分に語り尽くせなかったことは、この聖霊を通して、すべてが明らかにされます。

聖書の中で最も大切なポイントは、主イエスの十字架と復活にあります。

(1) 主イエスの十字架は、罪人の罪を赦し、そのたましいに平安と喜びをもたらします。

(2) 主イエスの復活は、罪人に新たないのちを確信させ、希望と使命をもたらします。

このように、「信仰とは自分自身のみじめな状態を受け入れ、主のプレゼントを素直に受けることを決断、決心すること」と言えるのではないだろうか。

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。

(イザヤ 30・15)



主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな

城倉 徳子



徳子さん(左から2人目)、ご家族と

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

(詩篇103・2～5)

私は終戦の年一九四五年九月二十九日生まれの人です。長野県伊那市高遠町(旧長藤村)で、父は教師、母は村の助産婦でした。兄、私、弟、妹の四人は、栄養失調や病氣等で死の淵に立ちながらも神様に命を守られました。親は私の将来を考えて教師になることを勧め、私も教師を志望しました。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて

志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

(ピリピ2・13)

進取的な父母は私の信仰を受け入れてくれました。四人兄弟は皆、教師となりました。無力ながら教育者の道を全うできたことは、ただ神のあわれみでした。お互いに、しみじみ話して感謝しております。

両親は私や弟妹の信仰生活を見て喜んでくれておりました。家族はみなベックさんにお会いし、聖書の真の神を知ることができました。

ある時、母がベックさんに「胸の奥が寂しい」と話すと、「イエスさまが癒してくださる」と言われ、喜んでおりました。父母は逝き、今私たち兄弟は各々の家庭で守られています。長男の兄を尊敬し、みことばで励まし合い祈り合い、神の愛に抱かれて暮らしております。

キリスト教と聖書と信仰

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

(ヨハネ14・6)

私は、高校で世界史を学んでからキリスト教に興味を持ちました。クラーク博士が北海道大学に招聘された時のことや内村鑑三や南原繁、矢内原忠雄の本を読み、聖書についても学びくなりました。

大学に入り早速、聖書を学びたい、聖書を信じている人たちに会ってみたいと思いました。聖書研究同好会、K G K(キリスト者学生会)、教会などに出かけました。知識として学びたいと思っていました。「信仰」ということは新たな事柄です。私は各宗教について学び、その上で何が真理なのかを見極めようと考えておりました。内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』を読みまして、「世界中の宗教を研究していたら、自分の一生かかって真理を知り尽くすことはできない。私の

6人の証し

Unser Herr lebt

そばにキリスト教があり、信じるに値すると思われたので、キリスト教の道に進んだのである」と書いてありました。それで、私も今はキリスト教を、と考えました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。
(マタイ7・7)

大学一年の夏、K G Kのバイブルキャンプに行きました。

信仰の話になると心を閉ざしていました。奈良女子大学の清水先生に「私は罪人ではありませんし、信仰はわかりません」と言いました。先生は何もおっしゃいませんでしたが、見ると目に涙を浮かべておられました。ハッとしました。聖書に出てくる愚かな「放蕩息子」のような私、自分の罪を知らず、十字架のご愛を知らず、救いを受けとれない傲慢で哀れな私でした。

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によつて知られ、はっきりと認められるのであつて、彼らに弁解の余地はないのです。
(ローマ1・20)

キャンプが終わり、我が家に帰る途中のことでした。バスの車窓から懐かしい故郷の自然を眺めていました。いつもと違って見えました。高原の美しい草花、空にさえずる小鳥、爽やかな風、大自然のそれらすべてが神様によつて創造され、豊かな生命で生かされ、今を謳歌していました。私までも神様の大きな優しい御手に包まれているのです。ちっぽけな存在の私が「神などいい」と心を閉ざしているにすぎません。涙が溢れてきました。「神様ありがとう」と心が素直になっていききました。主なる神様との出会いでした。家に着き、その晩は嬉し涙で祈り、目が赤く腫れてしまいました。

神のなさることは、すべて時になつて美しい。神は

また、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終りまで見きわめることができない。
(伝道者3・11)

頑なな私に、主は聖書に書かれている、天地万物を創造された神様、愛の神様を心に教えてくださいました。

以前は時々理由なき不安に陥ることがありましたが、感情の起伏がなくなり、平安と喜びの心になりました。学生時代は、K G Kの学生たちやドイツやイギリスからの学生のための伝道者たちに囲まれて、恵み豊かな信仰生活でした。教育実習で会った中学生に賛美歌を教えて一緒に歌いました。卒業して長野県に戻り、教職につきました。教師として働きながら、幸いな教会生活を送りました。卒業式には、手作りのみことばカードを児童たちに贈りました。

結婚・釣り合わないくびき

二十三才、当時の田舎では結婚の年頃になりました。そのころの私はクリスチャンと結婚して、クリスチャンホームで、子供を育てる考えでした。結婚話やクリスチャンの青年からの求婚もある中、軽い気持ちでまだイエス様を信じていない現在の夫との見合いに応じました。その日、信仰の証しをし、クリスチャンとしての人生を歩みたいと考えていることを伝えました。お断りのつもりでした。ところが彼は一人で教会の牧師と会ってくれたり、「クリスチャン生活を理解し協力します」と言いますので、お断りの理由がなくなっていました。クリスチャンに導かれるのかもしれないと思ひ妥協してしまいました。一九七〇年一月に嫁ぎました。城倉家は江戸時代は名主、村長、市会議員の旧家でした。それとは違い実家が新屋敷の私は、ダメ嫁でしたが、曾祖母や親戚の皆さんにも支えられ色々学ばせてもらいました。想定外なことに義母は信仰に大反

対でした。日曜日は礼拝に行かせまいと、何かと用事を言いつけられました。偏見のある田舎で、クリスチャンであることを隠していなければなりませんでした。私はこっそりたまにしか教会に行けなくなりました。学生の中から大切にできた聖書が、ある日なくなっていました。子供と祈ることも止めざるをえませんでした。独りで心の中でいつも主に祈っておりました。

家では心が苦しくなってしまう、声が出なくなってしまうしました。みことばに従わず釣り合わないくびきを選んだ罰だと思い、自分を責めていました。辛い後悔の思いは、親はもちろん誰にも言うことはできませんでした。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

(詩篇 50・15)

ベックさんに会った時に私は先ず、このことを話しました。「まだイエス様を信じるに至っていない方との結婚の罰で辛い生活です」と苦しい胸の内を訴えました。「主は懲らしめる方ではないよ」と言われて、心が楽になりました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

(イザヤ 41・10)

結婚後、夫はしばらく自宅からの勤務でしたが、その後は韓国勤務や日本に戻りまして数年の後、また長年にわたり木曾に単身赴任の生活となりました。私は結婚後も教師を続け、三人の息子を授かっておりました。義父母の子育て援助のお陰で健やかに育ち感謝いたしました。

ところが、高齢の義父が亡くなったのち、義母の入院が多くなりましたが夫は不在です。子供は小学生、中学生、高校生の頃でした。私は時々病院に泊まり、夜中に義母を見て朝急いで家に戻りました。

ある朝戻ると、部活動のある高校生の息子はもう家を出ていませんでした。食事もなくに食べないで行ったのでしょうか。その頃、突然「お母さんは僕のことなんかどうでもいいと思っているんですよ」と言われしました。心が痛み、悲しい思いをさせていることを深く悔やみました。

入院中の義母は病院の医師が看てくれる、しかし我子は母の私しかいないことに思い至りました。義母には嫁ですが、子供を見なければいけないと反省し覚悟をしました。単身赴任中の夫には頼ることも出来ません。子供には父親の強さも必要です。父母役を一人で行うことを覚悟いたしました。いつもいつも主に祈りながら支えられました。

若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。

(箴言 22・6)

その頃世の中はバブル景気で、共働き家庭が増えました。親の愛が届きにくくなってきたのでしょうか、心が荒れる中学生ができました。対応に悩み心を病む教師も出てきました。授業の前には、授業が成立するように祈って教室に向かいました。療養休暇の教師が出る中、私は自律神経失調症の頭痛、胃痛、円形脱毛症くらいで済みました。生徒指導や進路指導の校務分掌も加わり、駆け回る毎日、休日には昼頃までぐったりと寝ておりました。

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるよう

に、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント10・13)

神は乗り越える知恵をくださり、神は私と共に歩んで下さいました。今、生徒たちは社会の中堅となり活躍しております。往時^{おうじ}を共に語ります、感謝に堪え^たません。

教会から集会へ

平成一年にベックさんが伊那に来てくださいました。その頃、教会生活は喜びがなく苦しい信仰生活でした。神のためにと人の計画した教会での事々の奉仕に、多忙で行けない私はいつも心苦しく、立派を装う偽善信仰でした。

心を尽くして主に拠^より頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

苦しくなりました。長い手紙を書いて教会生活を終えました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。

(イザヤ41・10)

大好きな姉妹たちとの別れは寂しかったですが、人を見ずに主に従いました。教会を出た時はまだ伊那^{いな}キリスト集会はありませんでした。その後ベックさんが家庭集会に来てくださり集会も与えられました。兄弟たちがメッセージに来てくださいます。新しい兄弟姉妹も与えられて、祝福されています。主の奇^くしみわざに感謝です。聖書を土台の真実の信仰に導かれました。毎日の喜びと平安があります。二学期の始業式の頃でした。私は体育館の後ろで、喜びと感謝の涙にくれました。

教会には行ったことのなかった夫が、ベックさんに

集会での兄弟姉妹の信仰に出会い、私は平安への導きを祈りました。

「主よ、導いてください。あなたの道は最善ですから、あなたに従って行きたいのです。これまでの道はあまりにも苦しく振り返るのも辛いです。喜びのある平安になれる道に導いてください」。通勤の車中でも祈り続けました。

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。

(ヨハネ10・27、28)

祈りのうちにみことばによって導かれました。教会を出ることは一大事です、でも導きに従わないでいると

は会うのを喜ぶようになりました。私たち夫婦は、カナダ、ドイツ、北海道、高松、名古屋、沖縄、御代田などの喜びの集いに行くことができました。ドイツでお交わりの時に感動しました。ベックさんが日本に來られてから、求道者の名前をドイツに送り、ドイツの兄弟が印刷して心合わせて祈り続けてくださっていたそうです。その名簿の用紙が「こんな厚さになりました」と指で厚さ五センチ位を示されました。日本の福音宣教のために、そのように祈られて今があることを知り感謝しました。今、顔と顔を合わせてお会いできた幸せを、ハグして(抱き合って)喜び合いました。

御代田の別荘「羊の群れ」

主は凄^{すば}い恵みを下さいました。別荘を与えられました。ベックさんが献家^{けんか}式に、集う人が幸せになる家になりますように、とメッセージをしてくださいました。今、別荘は多くの人に用いられております。私たち夫婦は、

6人の証し

Unser Herr lebt

来訪者が楽しく、心身が癒され、エネルギーがチャージされて、幸せになれる家にと願って、整えております。
長男はベックさんの司式で結婚式をさせて頂きました。次男は家を建てる時にベックさんに祈っていただきました。

病の癒し

退職間近の六十才の時に、体が悲鳴をあげました。C型肝炎になりました。治療のためのインターフェロン一回目で副作用のため鬱^{うつ}になり、辛くて死にたくなりました。

主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。
(詩篇121・7)

対症療法の注射を週三回十年間、心身の不調は進みました。夫が農作業は勿論、家事全部やってくれました。

唯一礼拝に集うことで、何とか気持を保つことができました。とうとう肝臓がんになってしまいまして手術をしました。

この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。
(ヨハネ11・4)

手術直後に、研究開発中であつた待望の新薬が完成しました。神様は私の命を助けてくださいました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
(エレミヤ29・11)

これからの人生に、みこころを求めて主に祈り始めま

した。

もにおられる。

(申命31・8)

「集(つどい)蔵」とイエスさま

コロナ禍の折、高校生の孫たちが古い土蔵を整備してくれ、物置蔵が、人々の集いに使える言わば「快適蔵」、集いの蔵になりました。

この蔵を地域の人々が集える「まちの縁側」として、社会福祉協議会(社協)から登録指定され、多角的に使われ始めました。「愉^{たの}蔵(ゆつくら)」という「健康教育」も開かれています。これらは近所のフレイル高齢者対象の生活支援ボランティアです。そこではさらに集会の姉妹たちが「シスターズの愛の讃歌」と温かい交流やお交わりをしています。礼拝メッセージに来られる兄弟が、その折に聖書のお話しやお証しや信仰のお導きなどもしてくださいます。主に感謝いたします。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたと

夫と私は公民館の集い、老人施設、出前講座等に訪問活動をしています。

二〇二五年十二月、クリスマスにはイエスさまを紹介できました。

みことばを書いたクリスマスカードを百枚余手作りしました。ボランティアをさせていただいた先々で皆さんに渡し、救い主を紹介しました。その活動の詳細は、八十六才の夫と相談して計画しています。

主のくださっているこれら沢山の恵みに驚くばかりです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれでああなたのおきてを学びました。

(詩篇119・71)

6人の証し

Unser Herr lebt

すべてを感謝し、日毎に御心を教えていただきながら今日も、導かれるままに歩ませていただきます。

城倉 徳子（じょうくら とくこ）

長野県上伊那郡高遠町立高遠中学校長藤部校（現伊那市立高遠中学校）

長野県立伊那弥生ヶ丘高等学校、大妻女子大学短期大学部

長野県内小学校、中学校勤務

夫 直彦（なおひこ）

長男 直樹（なおき）、妻 五月（さつき）

二男 和彦（かずひこ）、妻 美里（みさと）

三男 誠（まこと）、妻 純子（じゅんこ）

我が家に聖書がやって来た

大石 道男



道男さん（一番左）、ご家族と

アメリカ文化と聖書

青春時代に見た西部劇のワンシーン。時は日曜日の朝。銀幕のスター、ジョン・ウェインとカーク・ダグラスは腰につけていたガンベルトを静かにテーブルに置きくと、日傘をさしたご婦人たちと連れだって教会へおもむいた。スクリーンに映し出されたのは拳銃の撃ち合いではなく、暖かいまなざしを浮かべたガンファイターが、町中の家族連れとともに幸せそうに教会の入口に入っていく光景でした。教会について私が受けた初めての印象は、こうしたアメリカ映画を通してだと思います。それでも人々が喜んで集う教会の姿を深く知ろうともしないで過ごした我が青春時代でした。

そんなアメリカ文化の中で見たもう一つの記憶は、アメリカ新大統領に就任したケネディの宣誓式を映したテレビニュースでした。ケネディは古ぼけた大型の本に手をのせて宣誓しています。広げた手の下の書物は聖書であるとアナウンサーが説明していました。ア



メロカ社会の中で聖書の存在の大きさと、その意味するところを、とうてい理解することはできませんでしたが、聖書というものには何かがあるだろうと、このとき感じたことが聖書との初めての接点であったのかも知れません。そして、下宿先の四畳半の部屋に初めてテレビが届いたその日の夕方、スイッチを入れると目に飛び込んできたのは、ケネディ大統領がその日暗殺されたというニュースでした。その後、アメリカは終わりの見えないベトナム戦争の泥沼の深みに入ってゆき、私もベトナム反戦デモに何度か参加するようになりました。そのような社会情勢の中で妻の美枝子と知り合い結婚しました。

生活の場所は渋谷区千駄ヶ谷せんたがやでした。すぐそばには山手線と並行して走る貨物専用線路があり、窓を開ければ、時々修学旅行の団体列車も通っていて、停車していたときには、学生たちの顔もよく見えていました。時代は変わり、貨物専用線は埼京線になりました。

歩きができるようになると、外に出るようになりました。乳母車に乗せて外に出るようにしていました。そんなのぶ子の子守役が私でした。長男でしたから当たり前のことだったんでしょう。家の近くの空地あきちでは近所の子供たちが集まってよく遊んでいました。私たちの子供時代はいつも外で遊んでいたのです。そのようなとき、大人たちもそばを来します。のぶ子の存在に気づきます。それは私がそばを通る大人に気づいたといったほうが正解かもしれません。「またあの人も乳母車の中ののぶ子を見ている」と感じつつ過ぎた少年時代でした。その当時は障害のある人が外に出るということは少なく、日本社会に福祉という言葉もないようなときでしたから、ダウン症ののぶ子への大人の特別な視線は日常のことでした。ダウン症の人たちは、多くの人が明るく、絶対に自分をごまかしたり、ウソをつかない、というよりウソをつくことを知らず、そしてなにより音楽を楽しむことが好きな人が多いようです。

その場所で長男が誕生し、長男はすぐそばを通過するいろいろな種別の列車の音を聞きながら育ったため、列車が通過する時に線路に響く音だけで列車の種類を言い当てていました。終末期に近かったベトナム戦争時には、通過する燃料専用のタンクは満載状態だとか、そうでないとか言っておりました。

その千駄ヶ谷の家から五分ほど乳母車うばぐるまを押して明治神宮に散歩に行き、広い芝生の上でくつろいでいたことが今でもなつかしく思い出されます。

妹のぶ子のこと

乳母車と言うと、実の妹の顔がすぐによみがえってきます。私の小学生時代のことです。当時私の家には藤とうを編んでできた乳母車がありました。私の兄弟姉妹は五人でありました。私は長男、妹の名前は「のぶ子」といい、下から二番目でただ一人の妹でありました。そののぶ子はダウン症で生まれたのです。のぶ子がヨチヨチ

のぶ子はある年から施設へ通所して過ごしてきました。四十三歳になって病となり、天に召されました。そのときの母の悲しみは、胸に強く迫るものがありました。

私の生まれ故郷である浜松市でののぶ子の葬儀は、藤枝・掛川キリスト教会の兄弟姉妹のもとでとり行なうことができました。当時は毎月のように夜の家庭集會が藤枝もしくは掛川で行なわれており、私ども夫妻も毎回のように入王子から集うことができました。そして私の両親もすでにベック宣教師ご夫妻との面識がありましたので、主をたたえる葬儀を行なうことができ、会場にはのぶ子が通所していた施設の多くの障害をもっておられる方々も参列してくださり、涙のなかで主を賛美し合唱をすることができました。

御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て…もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼ら

にはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。

(黙示22・1、5)

そこでは涙も、苦しみもなく、神様のそばで、静かにいこいましょう。神様の川は、恵みが恵みがあふれ、みんながまた集まるその幸いよ。

(日々の歌二三番の三より)

八王子での出会い

話しはさかのぼりますが、私は三十五歳となり、次男の誕生することがわかって、住まいが手狭てせまとなるために、八王子にある新興住宅の高台へと引越しを決めました。この新しき地こそが神の導きのようでありました。私は以前の家を仕事場にして八王子から通勤、妻は二人の子供とともに新しい地での生活を始めました。長男が小学校へと入学して二、三年後だったと思います。正確なことは思い出すことができませんが、その頃

妻美枝子は同じ住宅地に住むF姉妹と知り合いました。そして彼女のお誘いをうけて吉祥寺キリスト集会へと集い始めました。妻は聖書に書かれているさまざまな内容について興味を持ったようです。もちろん妻も聖書を読んだことはありませんでしたから、「主の救い」を求めて吉祥寺キリスト集会へと足を向けたわけではありませんでした。聖書の中に書かれているさまざまな不思議さにひかれたのではないかと思います。そして妻はF姉妹とともに吉祥寺キリスト集会へと出向いて行きましたが、しばらくしてからは、毎週火曜日の学び会へ一人で出かけるようになりました。また、毎月のように行なわれていたF兄姉宅で行なわれる家庭集会に集いました。それはベック兄弟による福音メッセージと奥様であるミンヘン姉妹によるドイツケーキ作りを通してのお交わりでした。妻はミンヘン姉妹が教えてくださるケーキ作りに熱心に取り組み、上手に焼けるようになりました。私も妻が家で焼くケーキの下ご

しらえの攪拌かはん作業を手伝うことがたびたびありました。

そんなあるとき、妻は、私のことをF姉妹から尋ねられました。F姉妹のご主人が言っていたそうです。「もしやあの人ではないだろうか、自分は今でもそのときの名刺を持っている」と。私が二十八、九歳の頃、F兄弟の会社と取引があって、訪問時に名刺交換をしていたようなのです。F兄弟には何か思い当たることがあったのではないと思いますが、私の記憶はまったくなく、こうして奇しくもF兄弟と再会を果たすものの私には初対面のように感じられたのです。

あなたは私の耳を開いてくださいました。

(詩篇40・6)

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。

(詩篇55・22)

聖書の信仰に導かれて

以後、吉祥寺キリスト集会での日曜礼拝への誘いを私も受けるようになりました。すでに妻の美枝子は何度も礼拝に参加し、また火曜日の婦人集会も出席していて、その様子なども聞いていましたらから、特別な強い抵抗はありませんでしたが、せっかくの日曜日という休日が、礼拝のために消えてなくなることが心に引かかりました。そんな思いの中、F兄弟が日曜日ごとに自宅まで迎えにきてくださることもあり、徐々にではありましたが、吉祥寺キリスト集会へ足を向ける回数が増えてきました。

もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を「喜びの日」と呼び、主の聖日を「はえある日」と呼び、これを尊んで旅をせず、自分の好むことを求めず、むだ口を慎つつしむなら、そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。

6人の証し

Unser Herr lebt

(イザヤ58・13、14)

そしてF兄弟からいただいたのが聖書です。旧約聖書と新約聖書の違いもわからぬ者のために主が兄弟を通して備えてくださいました。妻の手もとにはすでに聖書がありました。思わぬ出来事が家族に起きたわけでもなく、何か奇跡があったわけでもありません。ただ主である神が兄弟も姉妹もおられる新天地へと、ゆつくり時間をかけて導いたのだとしか考えられません。これが主である神の計画なのでしょう。そして数年後には息子たちの手もとにも聖書があつて、聖書のある家となりました。それぞれの息子にも、主はそれなりの試練を与えてくださったことは、今では感謝するばかりです。

多くの兄弟姉妹に恵まれ、遠方でのバイブルキャンプにも何度か集うことができました。妻美枝子の父親

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。
(詩篇103・1、2)

主の造られた大自然のもとで

主イエス様を紹介され、聖書がともにあつて、たくさんの主の恵みを与えられて過ごした約二十五年間の八王子での生活。あるとき妻の体調に変化が生まれました。それは耳の中で訳のわからない雑音が聞こえ始めたことでした。それが辛くなり、違う場所で生活を始めてみたいと言いました。私の仕事の環境も大きく変わっていて、いまが人生を歩む分岐点にすることに気づいていましたから、妻の望む未知の静かな場所を祈りつつ、新しい生活拠点を探し始めました。新生活となる場所の最低条件は決めてありました。それは必ず日曜礼拝に集うことのできる場所であることでした。その

が福島県喜多方市で生活をしていたころ、妻はどうしても自分の父親に主イエス様の救いを知ってほしいと願っていました。その当時、ベック兄も毎月のように仙台キリスト教会での福音伝道に行かれていました。いつも集会は午後始まりでしたので、私たち二人は郡山駅で義父と待ち合わせて仙台へと向かい、集会の帰りは郡山駅で義父と別れ、夜遅くに高速道路を走らせて帰ってきたことが何度もありました。義父がベック兄との交わりを通して、信仰の確信を得たかどうかかわりませんが、集会の参加を喜んでおりました。また私の両親には、藤枝・掛川での集会のことを早い時期から知らせていましたが、なかなか参加をしてもらえませんでした。それでも父親の晩年、ベック兄弟がお見舞いにくてくださいたときには、父母ともに喜んでいたこと、そしてそれぞれの葬儀を藤枝・掛川キリスト教会の兄弟姉妹の支えによって行なえたことは感謝です。

結果、中年時代に妻とともに登った北アルプスの鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳への登山口、さらに黒部ダムへの玄関口の近くにたくさんの樹木に囲まれたとても静かな場所が与えられました。

すると、女中が、火あかりの中にペテロのすわっているのを見つけ、まじまじと見て言った。「この人も、イエスといっしょにいました。」ところが、ペテロはそれを打ち消して、「いいえ、私はあの人を知りません。」と言った。しばらくして、ほかの男が彼を見て、「あなたも、彼らの仲間だ。」と言った。しかし、ペテロは、「いや、違います。」と言った。それから一時間ほどたつと、また別の男が、「確かにこの人も彼といっしょだった。この人もガリラヤ人だから。」と言い張った。しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません。」と言った。それといっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、

6人の証し

Unser Herr lebt

「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。(ルカ22・56〜62)

ガリラヤ湖畔で漁師として、妻と姑とともに暮らしていたペテロが初めて主イエス様と出会ったのは三十代のなかばであったと言われています。私もペテロと同じように、聖書のみことばを道しるべとして、主イエス様に「ついて行きます」と、口では約束したかのようには礼拝で祈ってはいませんが、自分の信仰の弱さとは無知から主イエス様との約束を反故にしよう者でもあります。そして主イエス様を悲しませることたびたびです。しかし、主イエス様は、人の弱さをわかっておられ、赦してくださいます。ペテロのすばらしいところは、私は弱い人間だと正面切って認め、激しく泣いたことです。ペテロは人間の弱さを知りつくした伝道者でした。

的を射ているのかどうかもわかりません。このような者でさえも、主であるイエス様は呼びかけてくださいます。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ5・16〜18)

礼拝に集うには、住まいのある北アルプスのふもとから高速道路を南進し、右手に中央アルプス、左手に南アルプスを見ながら伊那キリスト集会へと車を走らせます。青空の広がった日に見えるそのすばらしい風景の造形の完成度にはただ創造主なる神の恵みが現わされています。もし、希望の天の御国に上ることが許されなならば、最初にのぶ子に会って、そして続いて主イエス様の御顔が見えたならば、天の御国に続く道を歩い

ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。(ヨハネ6・9)

主イエス様が二匹の魚と五つのパンを投げて五千人の人々を満足させたとき、漁師であった弟子たちにパンと魚をわたした少年が、もしも私であったならばと夢想してしまうと、私の知らないうちに、主イエス様は自分の近くにおられたのだと想えて嬉しくなります。そしてその場所は、主イエス様が主の救いを語りはじめたガリラヤ湖畔周辺の丘のふもとのようなです。主イエス様の歩かれたガリラヤ湖畔を聖書の記述から、そして賛美集『日々の歌』を通して、花咲くガリラヤはとても美しいところだと思えてなりません。

家の中でただ聖書を抱えて過ごしていることだけが信仰なのか、主が私に何を求めておられるのかを、いまだにわかるものでありません。救いとか、確信とかも

てきたことを感謝したいと願っております。

私は知った。神のなさることはみな永遠に変わらないことを。それに何かをつけ加えることも、それから何かを取り去ることもできない。神がこのことをされたのだ。人は神を恐れなければならない。(伝道者3・1)

大石道男(おおいしみちお)

一九四四年 浜松市生まれ、

桑名デザイン研究所卒業

妻 美枝子(みえこ)

長男 歩(あゆむ) 八王子市在住

次男 隼(しゅん)、妻 ヘレン、孫二人、ニュージーランド在住

御子をさえ惜しまずに死に渡された神の恵み

平良久美子



久美子さん(前列中央)、集会の皆さんと

以前、「主は生きておられる」28号に私の乳がんのこと、石垣キリスト集会が起こされたこと、兄の病のことなど、主がどのように私たちに働かれたかの証しを書かせて頂きました。

今回、同じ事を語ってもいいものか迷いましたが、与えられたことばなどを通して主は励ましてくださいました。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。
(ローマ8・32)

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望み

を持つようにしてくださいました。
(1ペテロ1・3)

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。
(ヨハネ3・30)

ボンヘッファー氏(第二次世界大戦下に殉教したドイツ人牧師)の詩がもとになっている讃美歌『善き力にわれ囲まれ』の歌詞「たとえ主から差し出される杯は苦くても 恐れず感謝を込めて愛する手から受けよう 善き力に守られつつ 来たるべき時を待とう 夜も朝もいつも神は我らとともにいます」に励まされて、主の恵みは何回語ってもいいのかな、わたしの祈りの乏しさや、信仰の貧しさはどうでもいいのではないか、父なる神様、御子イエス様、聖霊様がどのように恵んでくださったかを語ったらいいのでは、と思わされました。

私に主がどのように関わってくださったかを三つに

分けて語らせて頂きます。

一つ目は私に与えられた乳がんの恵みです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれでああなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。
(詩篇119・71、72)

京都のクリスチャン・ナースを養成するバプテスト看護学院を卒業し、京都で看護師として五年間働きしました。その後、片麻痺の残る母の療養を助けるため沖縄に戻り、保健師の資格を取り、病気の予防活動等に関わっていました。(当時、沖縄県は保健師駐在制度が施行されていました。保健師は県の地方公務員身分で全市町村に配置され公衆衛生活動を行ない、無医地区に配置された場合は住民の健康管理の責任を担っていました。)

6人の証し

Unser Herr lebt

その頃も、私はすでに教会に通っていましたが、姉から貰った、吉祥寺キリスト集会の宣教師ベックさんのメッセージテープ「こんなに素晴らしい救い」などを聴いているうちに、しだいに教会から足が遠のき、沖縄キリスト集会に集うようになりました。

一九八八年、私が三十六歳の時、沖縄キリスト集会に集い始めて三か月後、左乳がんのため左乳房全摘術を受けました。

完璧に健康管理をしていたつもりなのに、「何故、どうして病気になったのか?」、保健師としてのプライドが痛みました。何気ない面会者の「どうして乳がんになったの?」の問いかけの言葉に反応し、原因に囚われ始め、信仰の混乱に陥り、祈ることも出来ませんでした。手術後大量に出血し、目を開けることも出来ないほどの貧血状態となりました。食事が取れず味噌汁の中に入っている小さいおネギが石のように重く飲み込むこ

これまで、あたりまえに食事をしていたことも、何気ない日常生活も主からの支えがなくては、出来ないことなのだと改めて思われました。

主が共にいてくださり、信仰の友やキリスト集会の信徒の交わり、とりなしの祈りなどに支えられて過ごすことができました。

仕事に復帰し、仕事で出会う患者ご家族等で問題を抱える方々や難病の方々と福音を語る機会が与えられました。患者さんと、集会の兄弟姉妹たちとの交わりに導かれ、イエス様を受け入れ、召されていた方との出会いもあり、自らが病むことで、病の中におられる方々との出会いが祝福されたのでした。

「何が原因だったのか?」と自分の限界のある知識や知恵で探りあてることなど出来ない事であり、理解する必要があることを、祈りを通して教えて頂きました。そして「何のための病気だったのか」と問うことは、イエス様との祈りの深い交わりを通して神様のご計画の

とができず、水さえ飲めないほど、憔悴していく日々でした。「イエス様、私をお見捨てになったのですか?」と思うほどでした。

入院中、自己憐憫と因果応報の考え方に囚われ、原因追及してやまず、保健師なのにと、良心の呵責に苛まれてしだいに追い詰められていました。

そんな中、京都で学生の頃から十年近く通っていた教会の信徒たちから祈りと励ましの寄せ書きが送られてきました。その寄せ書きの中の「神様を信じ抜いてください」の言葉が突然、目にとまりました。「信じてください」ならなんとなく分かりますが、「信じ抜く?」、その時の私にはよく理解出来ませんでした。

また、キリスト集会の信徒の方々との交わり、とりなしの祈りや、聖霊様の導きにより「なぜ病気になったのか?」の原因追及から「何のための病気なのか?」と祈り求める思いに変えられる不思議な経験をしました。

導きに素直に従うことであり、それは聖霊様の助け無しにはできないことだと改めて知る経験でした。

一度目の手術から二十年間は出来るだけの自制をしながら生活し、主治医から転移もないので「完治」との太鼓判をおされ、二〇〇八年、経過観察終了となりました。それ以後十年間は専門病院ではなく民間医院で乳がん定期健康診断を受けていました。健診結果は何の問題もありませんでした。

二つ目は二度目の乳がんを通しての恵みです。

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。(ピリピ1・29)

わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行なう。どうしてわたしの名が汚されてよからうか。わたし

はわたしの栄光を他の者には与えない。

(イザヤ48・11)

二〇一七年(当時六十五歳)、乳がん定期健康診断では異常なしでしたが、数か月後、右乳房に違和感があり専門病院を自ら受診しました。その専門病院には、一九八八年に一回目の手術を執刀した医師が健在でした。一回目の手術後に大量出血があったことなど経過をよく知っている医師に巡り会え、不思議な主の導きを感じました。しかし二週間後、精密検査の結果、医師から「悪性でした。右乳房全摘手術を考えています」と診断と治療方針を聞いた時は、手術後に、一回目と同じように二度も大量出血が起こること、また骨転移のこととは予想だにもありませんでした。

保健師の私は、「三十数年たっても原発の乳がんになったことで他の患者さんの不安材料になるのでは?」
^{わすれ}と思い煩いました。「定期健康診断時の医師が患部に

の生活をする私に対し、主の御心に立ち返るように聖霊様はとりなしの祈りをなさっていたことでしょう。

手術室に向かう時、集会の姉妹がみことばを読み祈ってくださいました。

手術後またしても、手術部から出血が起きました。胸部を圧迫止血し、出血が続いている状態のまま、術後十日目に退院となりました。突然の出血と痛み、先の見えない不安を抱えながら、主に「どうしてこのようなことが起こるのですか?」、「わたしの嘆きを聞いてください」と主に叫び、祈るばかりでした。

胸に溜^たまった血液を吸引するため外来通院をしていましたが、退院して数か月後、歩行時に痛みが出てきたため検査し、その結果、左骨盤に骨転移が見つかりました。車椅子の生活となり、痛みと次から次へと起こる出来事や主治医との治療に関する意見のくい違いに疲れを覚えていきました。

気がついてくれていたら」とか「私が専門職としてなぜもっと早く気づけなかったのか」と過ぎたことに対して自責の思いや言い知れない怒りがこみ上げてきたのでした。これまで主が知恵と力を注ぎ導いてくださったことへの感謝が薄れ、周囲の人々からの問いかけに対して、三十数年定期健康診断を毎年受診していたことは何だったのかと、自分の正しさを証明しなければ気が済まない生まれながらの性質と欲求が私を取り囲み傷ついていきました。

一回目の手術後の痛みや生活上での不自由さが思い出され、術後の痛みや生活への負担を軽くしたいと、医療関係者のネットワークを活用し、手術を受ける前に親しい仲間に民間療法の数々を紹介してもらい試してみました。今思い返せば、主に祈ることより先に、三十数年間転移もなく暮らせた自負心で、持てる知識を総動員し動き回っていたのでした。そのような自分本位

やがて車椅子から松葉杖^{まつばづえ}歩行となりました。「痛みから解放してください」と祈りつつ、御ことばに助けを求めます。胸の筋肉が部分的に切られ、萎縮しているために息苦しさや慢性的になった苦痛、また転移した左骨盤の痛みは思っていた以上に辛いものでした。

痛みに直面すると、ついつい「痛みを和らげてください」「何々してください」と主に願うだけの自分本位の祈りになります。痛みの程度は私を知り尽くしている主によって調整されていることを忘れてしまっています。しかし罪赦^{ゆる}された罪人にすぎない傲慢^{ごうまん}な私が、何より優先して気づくべきことは、肉体の病よりも、疑う余地のない自分自身が一番深く重い罪の病を、ご自分の御子でさえ惜しまずにお与えくださり、十字架の死の血潮ですでに神様が癒やしてくださったことでした。

十字架のイエス様の姿を思うと、毎月治療のため受ける三本の筋肉注射などの痛みも、私の耐えられない限界を超えないように調整されていると思うと痛みが

和らぎます。

聖霊様のとりなしの祈りを通し、「発見の遅れも主の導き。主はすべてを支配されること、自分自身を責めなくてもいい」と、すべてが神様の御手のうちにあると強く思わされて、その幸いを味わう者に変えられたのでした。

私の人生における目標は神のものであり、自分自身のものではないこと、復活の希望があること、ここに私の慰めがあります。

よくベックさんが言われていた「どうして？なぜ？と問わないことが信仰ですよ」の意味が少しわかるような気持ちです。

二〇二三年、骨転移が再発し、放射線治療を行なうことになりました。再度、車椅子生活となり自力歩行など出来ない状態でしたが、痛みと生活の不自由さの中でも、主の導きに従えるように聖霊様に「祈りを導いてく

ださい」と祈れました。だんだんと回復し杖歩行となり、現在ゆっくりですが自力歩行可能となりました。今の自力歩行が医療の力だけによるとは思えません。主は今後、どのようなご計画をお持ちなのでしょう。

苦難と窮乏きゆうぼうとが私に襲いかかっています。しかしあなたの仰せは、私の喜びです。あなたのさとしは、とこしえに義です。私に悟りを与えて、私を生かしてください。
(詩篇 119・143、144)

三つ目は患者さんたちや関係者との出会いの恵みです。

彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。初めの雨もまたそこを祝福でおおいます。

(詩篇 84・6)

従来の薬の効果がなくなっただんだん腫瘍マーカーが高くなり、新薬を服用することになりました。今も服用し、副作用と共存しつつの療養生活です。病院外来や患者会などで乳がんの転移や重篤じゅうとく症状のある同病の患者さんとの交わりに導かれる機会があります。彼女たちの語る嘆きのことを主と共に聴きます。

よく交わりを持つているある若い患者さんに、「せっかく病気になったんだから…」、「死は終わりではないのよ…」とこんな会話をします。その患者さんから「平良さんのコアはなんですか」と問われ、たくさん説明したように思い出します。その時、その問いに驚くと同時に、信仰を与えられている感謝の思いが湧き上がってきたのが忘れられません。どのように答えたか、はつきり覚えていませんが、今、それを問われたら一言「イエス・キリストがいつもともにいてくださることですよ」と言います。

健康管理の一環として実施している「ボディトーク

健康体操」などの指導をしてくださる恩師から、「すこやかに病む」ようにと声をかけられました。すこやかとは素直で、何のもつれもなく、ながれのいいことらしいです。私流に、「すこやかに病む」とは、主は私にとって最善をなしてくださることを信じ、病と共にすこやかに生きることと解釈しています。

病の中での弱さ、それはいつも自分自身を中心に据えようとすること、つまり主を見失う罪です。無力さを徹底的に知らされ、いつも自分本位の祈り、どうしようもない私に対して、イエス様は「神のなさることがわからなくても、信じ抜くこと」だよと言われます。私のために、ご自分の御子さへ惜しまずに死に渡された方が、どうして御子と一緒にすべてのものを、私に恵んでくださらないことがありますか。主は私に最善をなしてくださること、そして「主から差し出される杯たまげは、苦くとも恐れず、感謝を込めて愛する手から受けられ

るように」と信じ抜く祈りを聖霊様に導かれて今があります。

また兄弟姉妹の証しやみことばの交わり、とりなしの祈りを通し、明日のことは明日に任せて、すこやかに病む一日、一日を歩む事が大切なのだと知らされました。最後に、河野進という方の「病まなければ」という詩を紹介します。

病まなければ ささげ得ない祈りがある
病まなければ 信じ得ない奇跡がある
病まなければ 聞き得ないみことばがある
病まなければ 近づき得ない聖所がある
病まなければ 仰ぎ得ない御顔がある
病まなければ 私は人間でさえあり得ない

平良久美子（たいらくみこ）
京都バプテスト看護学院・沖縄県看護学校保健学科卒
沖縄県保健所勤務、沖縄県看護協会海外研修生コ
ーディネーター



主のあわれみは尽きない

小笹 靖



靖さん(右)、奥様の恵さんと

生い立ち

私は、一九五五年大阪府八尾市で生まれ、祖父母、父母、叔母、姉、兄の八人家族の家庭で育ちました。祖父は信心深い人で、家には仏壇と神棚があり、毎日手を合わせていました。父は、厳しく、頑固な人でしたが、家族のために一生懸命働いてくれました。母は優しい人で愛情を持って育ててくれました。

子供の頃の私は、おとなしい性格でしたが、友達とはくさんいました。小学校の高学年の時、友達の家に遊びに行ったその帰りに、人間は死んだら光のない闇の中に行ってしまうのだろうかという思いが突然湧き、怖くなって全力で走って帰ったことがありました。なぜそのような思いが湧いてきたのかは覚えていませんが、死を意識し、死の恐怖を感じた初めての出来事でした。

希望した進学高校に入学することが出来ず、やむなく工業高校に入学しました。当時工業高校から大学に進学する人は僅かでしたが、高校の推薦を受け進学す

ることが出来ました。大学に入学する直前、検査入院していた父が六十歳で亡くなりました。突然のことでしたので、驚きと、人間は死んだらどこに行くのだろうというむなしさを感じたことを覚えています。

大学卒業後、社会人になってからは、大きな問題もなく、一九八七年に友人の紹介で知り会った妻と結婚しました。週末には趣味のテニスやジョギングと一緒にし、人生を謳歌おうかしていました。ところが、結婚して十年後、四十二歳の時に大きな試練が与えられました。

試練を通して主イエス様と出会う

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜

びおどる者となるためです。(1ペテロ4・12、13)

入社してから十五年程、工場に在籍していましたが、その後営業への配置転換がありました。慣れない営業の仕事に対するストレスやオーバーワークよって、精神的にも肉体的にも限界を超え、体は悲鳴を上げていました。その結果、食欲減退、不眠や動悸などの症状が現れ、今までに経験したことのない不安感や焦燥感しょうそうかんが襲ってきて、仕事が出来る状態ではありませんでした。過度のストレスによる不安神経症と診断され、休職せざるを得ませんでした。

回復の兆しが見えず、自宅で悶々もんもんとしていた時、会社から職場環境を変えてみてはどうかという話があり、休職して半年後、大阪営業所から名古屋営業所に転勤することになりました。引越しの時に、妻は住んでいたマンションの知り会いの方から、キリスト集会の証し

集『光よあれ』の本を頂き、名古屋に集会があることを

知りました。不安の中、名古屋での生活が始まり、しばらくしてから名古屋集会に行ってみたいという思いが与えられ、礼拝に行ってみました。罪や十字架の贖あがないや、よみがえりのいのちなど、今までに聞いたことがなく、その意味はわかりませんでした。名古屋キリスト集会の兄弟姉妹が、私たち夫婦を温かく迎えて下さり、礼拝に集ってみようという思いが与えられました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

(マタイ11・28～30)

だから、あすのための心配は無用です。あすのことは

あすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。(マタイ6・34)

あなたの方の会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント10・13)

試練を通して真の神であるイエス様に出会いました。そしてこれらのみことばを通して、不安の中にあった私は、慰めと励ましを受け、生きる力と希望をいただき、みことばに信頼して歩んでいきたいという思いが与えられました。名古屋キリスト集会に集って二年目の一九九九年「豊橋喜びの集い」で夫婦共に受洗の恵みに

与^{あずか}り、互いに祈りました。受洗の時に私が選んだみことばです。

主イエスを信じなさい。そうすればあなたも、あなたの家族も救われます。
(使徒16・31)

妻が選んだみことばです。

いつも喜んでなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ5・16～18)

体調も回復し、名古屋での仕事や生活にも慣れてきた頃、妻の父が脳梗塞で倒れ、看病の甲斐なく六十七才で亡くなりました。妻は父に天国のことを伝えていたので、天国での再会を心待ちにしています。四年半の

名古屋での生活を終え、大阪本社に戻ることに、妻の実家である京田辺で妻の母と三人で暮らすことになりました。仕事では厳しい場面が多々ありましたが、みことばや祈りを通して、イエス様が支えてくださり、二〇一五年八月六十才で定年退職しました。その年の三月、妻の母が九十一歳で天に召されました。葬儀には集会の兄弟姉妹や、親戚、近隣の方も参列してください、福音の種がまかれ、主の導きに感謝しました。

母の救いと定年後の歩み

私の母は、姉と二人で暮らしていましたが、介護が必要となり九十五歳の時に、施設に入りました。コロナ禍の前でしたので、度々施設に訪問することが出来たのはとても感謝なことでした。母は自分をクリスチャンとは申しませんでした。が、女学校の時に『日々の歌』一八〇番と同じメロディーの賛美歌「いづくしみ深き」を聞いたことがあったようで、その曲を聴くのがとて

も好きでした。或る日、兄弟姉妹が施設に訪問してください、お祈りをしてくださると「アーメン！」といったことは驚きでした。主が働いてくださり、母を救いへと導いてくださったことを確信し、感謝しました。その後、九十七歳で天に召されました。穏やかな顔を見て、天国へと導かれたことを確信しました。葬儀は姉と兄の意向で仏式で行われましたが、親族の挨拶の時に、私にも挨拶をする機会が与えられ、イエス様を証しすることが出来、主のあわれみと導きに感謝しました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえります。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるので。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

(ヨハネ11・25、26)

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キ

リストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
(ピリピ3・20)

これらのみことばを通して、信じる者は永遠のいのちが与えられていることを知り、子供の時に思った死の恐怖や父が亡くなった時に感じた死のむなしさからも解放されました。そして何よりも嬉しいことは、天の御国での再会の希望があるということです。

定年退職後は、ボランティア活動をしたいという思いが与えられ、視覚障害の方のガイドヘルパーの資格を取りました。早速ガイドの依頼があり、全盲の男性の方をガイドすることになりました。ガイド中にいろいろな話をしている中で、聖書に関心を持ってもらえることがわかりました。暫くしてから集会に行ってみていと言われ、一緒に芦屋キリスト集会に行きました。

喜んで集会に集まれるようになりましたが、その後、いろいろな事情があつて、今は集会には集われていま

せんがイエス様との静かな交わりの時を持ってもらえるようです。いつかまた、共に集い、共に主を賛美できることを願っています。

再び試練の中を通る

五十五歳を過ぎた頃から喘息と、副鼻腔炎の症状に悩まされていました。治療によって症状は落ち着いていましたが、六十六歳の時に症状が悪化し、就寝中にも発作が起こり、睡眠に支障をきたしました。次第に精神が不安定になり、以前のような不安感や焦燥感、気力がわかないなどの症状が出てきました。心療内科を受診し、薬を処方してもらいましたが、副作用が酷く、体調は悪くなる一方でしたので、病院を変え、入院治療することになりました。

コロナ禍でしたので、病室から出られない日もあり、入院生活は苦しく、辛いものでした。投薬によって眠れるようにはなりましたが、副作用がありました。回復の

兆しが見えず、神様はどうしてこのような苦しみを与えられるのかと、神様を疑う気持ちが生じるようになり、聖書を読むことも祈ることもできず、信仰が揺らぐこともありました。このような信仰の弱い者のために、信仰がなくならないようにとりなしの祈りをしてくださっている主イエス様と兄弟姉妹がおられ自分の信仰が守られているのだと、後になってわかりました。

わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直った、兄弟たちを力づけてやりなさい。」（ピリピ3・20）

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱

さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

（1コリント12・9、10）

予定より早く一か月余りで退院することになりました。退院後も倦怠感や気力が湧かないなど、薬の副作用に悩まされていました。副作用が少ない治療法を模索し、TMS治療という脳に磁気刺激を与え、脳の働きを正常に制御していく新しい治療があることを知りました。祈って東京の武蔵小杉にあるクリニックで治療することを決断しました。この治療は、一日三十分、三十三日間続けて、脳に磁気刺激を与えることで効果が得られるという治療法です。

川崎にある国際交流センターに滞在し、治療に専念しました。治療は午前中に終わるので、午後は、リハビリを兼ねて、訪ねたことのない観光地や公園に出かけることにしました。中学校の修学旅行で行った東京タ

ワーが懐かしくなり、行ってみようという思いが与えられました。近くに麻布十番があり、集会の兄弟がおられることを思い出しました。みこころならお会いできるだろうと主の導きのまま歩いているとご自宅が見つかりました。突然訪ねたにもかかわらず、温かく迎え入れてくださり、お交わりをしていただき、主のあわれみと恵みに感謝しました。

試練を通して、苦しみや悩みが与えられ、時に神の存在を疑い、自分の正しさを主張する者でしたが、このような者を決して見放さず、豊かな恵みによってあわれんでくださる主のご愛に気づかされ、真の悔い改めに導かれました。試練を通して自我を砕いてくださり、主のみそば近くに在る者としてくださったことを感謝しました。

主は、いつまでも見放してはおられない。

たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによつ

て、あわれんでくださる。主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。(哀歌3・31〜33)

私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル4・16)

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるのですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。(ヘブル12・11)

古希を迎えて

体調も少しずつ良くなり、TMS治療の半年後に、盲導犬候補の「パピー」を生後二か月から約一年間預かり、社会性を身に着けさせるパピーウォーキングというボランティア活動を始めました。現在三頭目のパピーの

子育てに奮闘中ですが、楽しく充実した日々を過ごしています。この活動を通して、多くの人と知り合う機会が増え、みことばカードや冊子をお渡しすることが出来、主の導きに感謝しました。二〇二四年六月、コロナで五年半閉ざされていた我が家での家庭集会が再開されました。イエス様をまだご存じない方も来られ、祝福された家庭集会となりました。

二〇二五年八月十七日に古希を迎えることが出来ました。度々試練が与えられましたが、乗り越えることが出来たのは、自分の力や努力によるものではなく、主のあわれみに尽きます。主が良くしてくださったことを忘れることなく、尽きない主のあわれみと恵みに感謝し、まだ救われていない家族、親族や、知人の救いを祈りつつ、残された人生を主と共に歩みたいと思います。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてく

小笹靖(こざさやすし)

一九五五年大阪府八尾市に生まれる

大阪府立布施工業高校、近畿大学理工学部卒

妻 恵(めぐみ)

ださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

(詩篇103・2〜5)

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きな いからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

(哀歌4・22〜24)



ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです

池田あかね



あかねさん(左)、お姉様の純子さんと

私は一九五九年に茨城県北の町で生まれ育ち、家族は両親と一つ年上の姉(海老根純子)がいました。両親は私たちを愛情深く育ててくれました。無宗教でしたが形ばかりの仏壇はあり、それはいつの間にか物置と化していました。

私は、ミッション系高校に通いましたが、神様には関心がなく、ましてや信じることは出来ませんでした。聖書の創世記を読み、名前の羅列を見ただけで挫折する者でした。姉は三十年程前からキリスト集会を通して信仰を持っていましたが、何故神様を信じられるのか私は不思議で仕方ありませんでした。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです…

(1コリント1・21)

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近

づいてくださいます。

(ヤコブ4・8)

その後結婚し、長男、長女、次男が与えられましたが、次男真彬を通して神様を知ることとなりました。真彬の簡単な紹介をまじえて、信仰に導かれたことを述べさせて頂きます。

真彬のこと

幼少期から小学時代の真彬はおとなしく、恥ずかしがり屋でしたが、明るくユーモアがあり、時には家族みんなを笑わせてくれました。若干几帳面なところもありましたが、気にはなりませんでした。ゲームやブロックの好きなごく普通の男の子でした。親類の中でも一番小さい子でしたので、みんなに可愛がられていました。

優しい子でしたが、中学二年生の頃から段々話さなくなり、機嫌が悪いことも増えて来ました。多感な時期

でもあるので仕方がないと思っていましたが、高校に入ると気難しさも次第に増して来ました。高三の頃には私と全く話さなくなり、無言の反抗に、どう扱っているかわかりませんでした。彼の態度は尋常ではなく、私はお手上げ状態でした。

あなたがたの思い煩いを、いつさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

(1ペテロ5・7)

進学を希望せず、高校卒業後は茨城県南の阿見町の会社就職しました。私は正直なところ、彼と顔を合わせるのも辛かったので、寂しさや心配はありましたが、ホッとした気持ちの方が勝っていました。親元を離れて一人暮らしをしたら、親の有難みも分かるだろうとおごった勝手な思いもありました。

6人の証し

Unser Herr lebt

高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。

(箴言16・18)

就職当時、それまで、登校時間のギリギリまで寝ていた子が、早起きして出社していたとのこと。その緊張の中にも、独立した喜びもあったと思います。しかし、次第に生活や仕事に疲れて行つたのではないかと思います。

勤務態度はまじめだったと思いますが、後に息子の友人から聞いた話では、同僚に心ない言葉を言われ、傷ついていたようでした。

二年目頃には自ら心療内科を受診、通院していました。人間関係なのか原因は分かりませんが、悩み苦しんだ末の選択だったのでしょうか。親からの聞き取りが必要だとのことで、私たち夫婦も病院へ行く事になりました。診断結果は、軽いアスペルガー症候群で、もう通院の必要はないが、気になる事が何かあれば来なさい

ということでした。初めて聞く病名、以前より痩せた息子の姿、医者との相性等、気がかりと不安がよぎり、本当に大丈夫なのかと思いました。

しかし、離れて暮らしていることもあり、また、医師の「軽い」と言う言葉に不安をかき消し、時々送った宅配便に手紙を入れた程度でした。

就職して三年目の二〇一八年五月に、自らいのちを絶ってしまいました。二十一歳でした。何が原因かわかりません。本人の残したメモ書きや、取り寄せた病院の診断書から、うつを患っていたようでした。身辺整理をし、祖母や私たちに会い、その後での計画的な自死でした。そこまで追い詰められていたことに、何も気付いてあげられず、可哀想なことをしたと悔やまれました。また、目に見えない病によって、人生を絶たれたことが、残念でなりませんでした。

その日、夕方、息子の会社から電話があり、瞬時に抱

いた嫌な予感の中しました。急遽、長男とたまたま近くの会社にいた主人と合流し阿見町の病院へ向かいしました。その途中、病院からの電話で、息子の状況説明と延命装置を止めるか止めないかの問いに「私たちがそちらに着くまで止めないで下さい」と返事をしました。

長男には「もう、ダメかも知れないから覚悟をしておいて。でも後追いはしないでよ」と、念を押すように言いました。長男は繊細でもあり、八歳違いの弟と、とても仲が良かったからです。

病室に入るや否や、主人は「真彬！ 真彬！」と二度三度大声で叫んでいました。私は息子の手を取り「家に帰って来れば良かったのに」と。長男は、無言で弟の頭をなでていました。誰も涙一つ流していませんでした。三人の頭の中は真っ白でした。

諸手続きを済ませ、私たちの帰宅後に真彬が病院から帰って来ました。既に真夜中になっていました。「お帰り。真彬」…寂しい響きとなりました。

長女は、二〇一七年からワーキングホリデーでカナダに滞在していたため、訃報を知らせても実感が湧かなかった様子でした。帰国後、葬儀に参列し、再びカナダへと、慌ただしい日々でした。

次男の死によって家族の苦しみは、筆舌に尽くしがたいものとなりました。自室に一輪の花を手向けていた長男の悲しみに暮れた後ろ姿を見た時、私は胸をえぐられる思いでした。長男と次男は、喧嘩らしい喧嘩をしたことがなく、二人はいつも一緒にいたから、その悲しみは計り知れません。「これから一緒に、やっていこうね、このことを乗り越えて、いや、乗り越えられることではないけど…」と言うのがやっとでした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。
(マタイ11・28)

苦しみの中で

姉夫婦は、その半年前(二〇一七年)の十一月に両親(海老根)の介護のため、隣町に越して来ていました。私の家から車で十数分の距離です。姉は時々、私に適した本やみことばカード等を持参しながら様子を見に来てくれました。

本を少しずつ読む中で、集会の証し集『主は生きておられる』には、ベックさんの次のような言葉がありました。「神様の許しがなければ召されない」、「召された人は、神様にお返ししたということ」、「最後に「召された人が羨ましい」と。その時には語っておられた意味が分かりませんでした。むしろ、「神様がいるなら真彬を返して！」と泣き叫んでいました。

またその頃、姉と親交のある姉妹からK兄弟作成の柴犬の子犬の絵ハガキを頂きました。その絵はとても可愛らしく、枕元に貼って毎晩見ながら癒されていました。

ひとり納得していました。

日立キリスト集会のある姉妹は、私に「イエス様よ、イエス様」と強く語られました。やはり意味は分かりませんでした。が、心に残る言葉でした。

その後、海老根兄弟の証しが鹿島キリスト集会や東京、埼玉、御代田にある集会で続けてあり、いつも同行させてもらいました。十二月の日立家庭集会にも集いました。まだ神様を信じられませんが、皆さんとお交わりが何故か楽しく、心が慰められました。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人も慰めることができるのです。(2コリント1・4)

そんなある日、息子の夢を見ました。息子が、「俺のこと、どう思う?」と聞いてきたので、私は、「絶望だよ、絶

しかし日々心は落ち着かず、掃除をしたり買い物等をしたりして動いてばかりいました。夕方にはテレビの再放送ドラマに釘付けになり、ドラマが終了すると、今度はビデオを借りて、のめり込む様に見ていました。その視聴する一時間だけが、すべてを忘れられる唯一の時間でした。

更に、翌六月からはパートの仕事に復帰するものの、自分の気持ちを誤魔化せる時間は短く、まわりつく苦しさから逃れられませんでした。何故自分がこんなにも苦しい境遇になったのかと、毎日が虚しく誰にもなく軽い憤りさえ覚えていました。

キリスト集会へ

辛く重い気持ちのまま過ごし、九月に姉から日立家庭集会の誘いがあり、誘われるまま何も考えずに行きました。その時のメッセージに、神様は私たちの内に住む聖霊だと聞いて、「神様が聖霊なら目に見えない」と、

望」と言って、そこで目が覚めました。言葉にならないこの苦しい気持ちだが、「絶望」なのだと、改めてその意味を知りました。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。

(詩篇40・1、2)

翌二〇一九年三月の日立家庭集会の頃には、あんなに重い心が軽くなっていることに気が付きました。二度と心から笑えないと思っていましたが、以前のようになんか笑っている自分がいました。これが、神様のみわざなのかと、見えなかった神様の存在を認めた瞬間でした。そして、集会の礼拝やお交わりには、皆さんが語る聖霊が満ちているのだと知りました。

6人の証し

Unser Herr lebt

振り返ると、姉夫婦のUターン、そして幾度かの各地での証しに同行させてもらった事、すべてが主の恵みでした。それに加えて、皆様の背後の祈りにも聖霊が働いてくださいました。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。
(ヨハネ13・7)

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
(エレミヤ29・11)

日立家庭集会は三か月に一度ありますが、もっと頻繁に集いたいと思うようになり、この年の四月からは日曜礼拝にも集わせて頂いています。

またインターネットでキリスト集会の「火曜学び会」

を姉夫婦の家で、仕事の合間を縫って聞くようになりました。メッセージが分かっていても分からなくても、その場に居ることが私にとって大切な時に思えました。二〇二二年に退職してからは、ゆつくりと「学び会」に参加出来、今では日立キリスト集会の姉妹方二人も加わり、楽しくお交わりをしています。これからも兄弟姉妹と共に信仰に歩んで行きたいと思います。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。

(ピリピ4・6、7)

神は言われます。「私は、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」
(2コリント6・2)

池田 あかね

茨城キリスト教学園高等学校、北里大学卒業

夫 誠(まこと)

長男、

長女、娘婿、孫(一人)

次男 真彬(まさあき) 召天



今あることはすべて、主の恵み

山田 渉



渉さん、奥様の奈保子さんと

1. 両親と家族の救い

私が最初に教会に行ったのは、父が酒乱で、父のようにならないようにと、母が兄、妹と私を教会の日曜学校に行かせたことがきっかけでした。両親の証しは「主は生きておられる」五十号にありますので、ここでは概略だけをお話します。

先にクリスチャンとなっていた母の弟(私の叔父)が、夫の酒のことで苦しんでいる母にイエス様を伝えると、母は妹を毎日幼稚園に送り迎えする途上のキリスト教伝道所の門に掲げられている看板に書かれたみことば「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ11・28)に引き付けられるようにして、教会に集い始め、主を受け入れました。兄も中学生の時に、その後、私と妹もそれぞれ主を信じました。残る父はそう簡単には行きませんでした。父は佐賀県出身で、八人兄妹の七番目の次男。まだ、小学生の低学年の時に両親を相次い

で病気で亡くし、口減らし同然で預けられた寺では冷遇され、厳しい修行に加え、学校にもろくろく行かせてもらえなかったようです。代用教員をして学費を免除

される農業高校を経て、東京の夜間大学に進み、アルバイトをしながら何とか卒業し、銀行に就職しました。そのような矢先に太平洋戦争が勃発し、徴用され戦地に送られます。終戦後、文字通り九死に一生を得て復員した時は、戦地で覚えた酒のため、肉体的にも、精神的にもボロボロでした。父は一口酒が入ると泥酔し、大声で喚き、暴れ、喧嘩となり、何度か警察の世話になったり、給料をその日のうちに全部飲み屋で使い果たすこともありました。結婚し三人の子供を授かった後も、酒癖は抜けず、何度も酒を断つと決心しても、誘惑には勝てず、失敗を繰り返していました。父は本来家族思いで根はやさしい性格でしたから、「牛に引かれて善光寺参りじゃ」と言いながらも、徐々に家族と一緒に教会に行くようになり、受洗の決心をして、やっとクリスチャン

ホームとなりました。父が五十歳の頃。家族、牧師、多くの教会の友人の祈りの結果でした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます
(使徒16・31)

確かに、父の酒の飲み方は変わり、回数も減りましたが、完全には解放されず、年に何回か再飲酒し、周りに迷惑をかけ続けていました。最後に主の大きな試練がありました。父が六十代半ばのこと、兄が三十六歳で心臓病で急死したのです。兄は優秀で、心からイエス様を信じており、両親の期待を一身に背負ってきました。母は信仰によって兄の死を乗り越えることができました。父はしばらく年月がかりでしたが、酒を一滴も口にしなくなったのです。父が酒から完全に解放されるためには、兄の死が必要だったのです。その後九十六歳で召されるまで約三十年、周りの私たちが驚くほどの変

6人の証し

Unser Herr lebt

わりようでした。これは人の努力によるのではなく、神様がなされたことです。

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」
(ルカ18・27)

父は、晩年体調を崩した母の面倒をずっと見てくれて、二人で支え合って、主に感謝して過ごしました。母は、父の酒のことで「苦労はしたけど、そのお陰でイエス様に出会えたんだから、そのことが一番感謝」と言うのが口癖でした。母も父の召天後九十五歳まで生かされ、二人とも召される直前の私たちへの最後のことは、申し合わせたように「天国で待ってる」でした。

2. 私自身の信仰の歩み

(1) 救われるまでの苦悩と、その後の喜び

私が中学一年の時に東大和市に引っ越し、近所の

ホーリネス教団の聖書学院教会に集い、中学三年の時に牧師にそろそろどうかと勧められ、母を喜ばせたいという思いもあって受洗しました。その時に受け取った聖書のことばです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
(ヨハネ3・16)

このみことばは、私にいつも励ましとなっていました、私が教会に行くようになったのは、「父のようになつてはいけない」「良い子になるように」ということであり、受洗も「母が喜ぶから」だったために、聖書の道徳的な部分に惹かれることはあっても、なかなかイエス様の十字架にたどり着きませんでした。受洗しても少しも自分の本質は変わらず、自己中心で、他人をさばく

ことばかりで、むしろ受洗してからのの方が苦しみました。それでもクリスチャンホームとして、家族そろって教会に行き、家族がそれぞれに役目を与えられ、表面的には良きクリスチャンホーム、教会の模範としてふるまっていました。教会の信徒たちは牧師を信頼し、福音

的で非常に恵まれていましたが、私自身はいつも悶々としていました。

大学入学の年は、第二次安保闘争の真ただ中で、一部の国立大学の入試が中止された年でした。入学した大学の専攻は中国語でしたが、学校は年末近くまで学生によって封鎖され、入学式はおろか授業も無く、バリエードをくぐってキャンパスに入っても、討論会続きで殺伐としていました。私は自から紛争の中に身を置いて、クラスのまとめ役を買って出たり、時には大学を糾弾するデモに加わったりもしました。そんな行動にやりがいを感じ、政治や社会の矛盾、時には人生観などを、闘志の先輩たちと深夜まで語り合い、先輩たちの純

粋な思想に憧れを覚えました。世の中を変えるには行動を起こさなければならぬと思い、聖書も読まなくなり、教会に行っても牧師のメッセージは少しも心に入って来ませんでした。

そんなある日、学内で学生の考えを異にするグループ間の争いを目の当たりにしました。あれほど理想を語っていた先輩たちが目をぎらつかせ、憎しみをいっぱいにして、敵対する学生に殴り掛かり、ゲバ棒を振りかざし、蹴り上げる様子を見て、ショックを受けました。虚無感に捉えられ、教会に行くことすら偽善に思え、もう教会には行くまいと思っている時に、教会の友人から教団主催の青年夏休みキャンプに誘われ、これを最後の機会にして教会から離れようと思って参加しました。豊かな自然の中で数日を過ごし、信仰の友人たちとも少しずつ打ち解け、ともに語らい、聖書のメッセージを聞くうちに、自分の固い心と霊が溶かされて行きました。

6人の証し

Unser Herr lebt

ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。

(1コリント12・3)

人を愛せない、自己中心とわがままな自分の生き方、神を認めようとしないことこそ罪であること、そのためにイエス様が十字架で肉を裂き、血を流されたこと、イエス様が主であることを信じればその罪が赦されるということを素直に受け入れることができました。

翌朝、早く目が覚め、一人でキャンプ場の庭に出て、聖書を読んでいると、次のみことばが心に迫ってきました。

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったの

です。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てべきです。世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないしと真実をもって愛そうではありませんか。

(1ヨハネ3・16～18)

それからは、神様の存在を疑ったり、イエス様への信仰がぶれることはありませんでした。毎週教会に行くことが待ち遠しく、牧師のメッセージが渴いた砂地が水を吸い込むように心に沁み込んできました。教会では、日曜学校の教師として子供たちにイエス様の話をすることが嬉しく、青年たちとの聖書研究や、伝道活動、他の教会との交わりなど、日曜日は朝から晩まで、一日中教会に入り浸っていました。大学では体育会系の運動部に入っていました。同時に聖書研究会にも加わ

り、学内のクリスチャンたちとの活動と交わりにも参加しました。同じ教会の姉妹と結婚し、三人の子供も与えられ、様々な奉仕を通して、教会の柱として牧師を支えて行くことが自分の使命であり、入社した商社での仕事を通して、周りにイエス様を伝えることを生涯のビジョンにしようと思うようになりました。

(2) 長男の不登校と中国駐在、家族のこと

商社では中国市場が担当で、長男誕生後、北京に駐在しました。帰国後、長男が小学校に入学して間もなく「不登校」となりました。自分で努力し頑張れば、イエス様がそのように導いてくださるというのがその頃の私の傲慢な信仰でした。相変わらず仕事は多忙で、家内が長男のことで苦しんでいたことを深くは受け止められませんでした。そんな時に今度は香港への駐在の打診があり、家内は長男のことがあって、環境が変わることに躊躇していましたが、私が押し切って、結局は家族そ

ろって香港に赴任しました。香港には大きな日本人小学校がありましたが、長男は行こうとは思いませんので、やむなく、家庭で勉強して、レポートを送るアメリカのフリースクールに登録しました。ただ、長男は香港の日本人教会の日曜学校には毎週喜んで通い、私たちも教会のクリスチャン家族とのよき交わりもいただきました。駐在中は狭い日本人社会の中で、家内はかなり精神的に追い詰められていたと思います。駐在員婦人たちの集まりなどで、長男の学校のことや引け目を感じたり、不登校の原因は母親である自分にあるのではと自責の念に捉えられ、気持ちは落ち込んで行くばかりのようでした。

家内が一時帰国した時、教会の友人の紹介で「不登校児」を持つ吉祥寺キリスト集会の母親を紹介され、電話するように勧められました。家内としては、何の期待感も無く電話しました。電話の向こうの姉妹は、「息子さんが学校に行くことが主の栄光ならば行くようにな

るでしょうし、行かないことが主の栄光となるなら行かないでしょう」と言って、「神のわざがこの人に現われるためです」(ヨハネ9・3)のみことばを読んでもくれたそうです。今まで長男が学校に行けるようにとばかり願って祈り、専門家や教育機関に相談してきましたが、重圧を感じるだけでした。ところが「神のわざが現われるため」と思うと、スーッと肩の荷が下りる気がしたそうです。

ちょうどその頃、香港の会社の上司が僕の長男のことを心配してくれて、家族を優先するべきだとアドバイスしてくれました。またその年一九八九年、北京で「六四天安門事件」が起き、中国取引が急激に落ち込んで、香港会社の中国要員を減らす必要が出てきました。主はこのタイミングで歴史的な大事件を起こしてくれたと受け取りました。駐在任期の半ばでしたが、帰国を申請し、あわただしく家族で揃って帰国しました。

家内は一旦、元の聖書学院教会にもどりましたが、吉

こにでも出かけます。さらに聖書だけを基礎として、間に人を通さず、直接イエス様につながって、「主を喜ぶ」集会の人たちを見て、自分の信仰のあり方を見直させられ、数年後、私も吉祥寺キリスト集会に導かれました。教会を離れることは身を切られるようでしたが、牧師にその思いを伝えると、イエス様だけに従うようにと一緒に祈ってくれました。私は祈りながら男泣きに泣きました。

その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。」

(創世記12・1、2)

帰国後、長男は規模の小さなミッション系の小学校

祥寺キリスト集会の日曜日以外の集まりに何度か集ううちに、集会の礼拝に導かれました。私は面食らいました。長く世話になり、育てられた教会から離れることなど考えられませんでした。何よりも私には教会の柱になるといふビジョンがありました。それでも、その後の家内の信仰生活ががらりと変わり、聖書を忠実に読み、みことばを蓄え、明るくなり、喜んでいるのです。その後七、八年、家内と子供たち、それに家内の母親は日曜日は吉祥寺キリスト集会へ、私は元の教会へと別々の場で礼拝するようになり、なかなか信仰的には一致できない日々が続きました。私は連日の残業で、出張も多い生活でしたので、家内とは信仰の話題を避けるようになり、二人で祈る時も一致できない思いを感じていました。時々、吉祥寺キリスト集会の家庭集会などの集会には「アッシー」(車での送迎)を頼まれて、僕も顔を出すようになりました。集会には牧師制度や献金制度はなく、一般信徒が聖書からメッセージをし、地方のど

に入学が許されましたが、それでもすんなりと通えたわけではなく、登校しようとするとうんざり込む、数日してやっと玄関を出ても先は歩けません。学校にたどりつくまでに数か月かかりました。そのような中でも、吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けました。受洗の前に次のみことばが読まれました。

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けてようとせず、自分の胸をたたいて言った。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」(ルカ18・13)

学校に行けないことは、本人が一番苦しかったでしょう。イエス様にゆだねることを学んだ最適のみことばでした。学校に徐々に慣れ、六年生の時には精勤賞をもらいました。子供のことを通して、私が努力したり、いろいろ計画しても、何の役にも立たないこと、すべてを主にゆだね、お任せし、主が下さる恵みを感謝して受

け取るという信仰が与えられました。長男はその後、長野県の大学・大学院に進みました。

心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言3・5、6)

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。

(箴言19・21)

その頃また、私の仕事で新しいプロジェクトが進み、二〇〇〇年秋、上海に三度目の中国駐在となりました。長男は大学のため日本に残り、家内、高校二年生の長女、中学二年生の次男と、当時八十七歳の家内の母親も一緒でした。上海では毎週日曜日、我が家で、駐在員として上海や近郊におられた兄弟姉妹と礼拝の時を持ち、

ベック兄弟のメッセージCDを聴いていました。上海の日本人駐在員も増え、礼拝は子供を含めると二十人近くになったこともありました。ベックご夫妻始め集会の兄弟姉妹たちが、毎年上海に来てくれて喜びの集いを開き、多い時は現地からの参加を含めて、百人近い兄弟姉妹が集まりました。

私の仕事上、海外駐在によって、家内はもちろん、子供たちにも多くの苦勞をかけました。特に上海駐在の時は、長女は大学、次男は高校の受験の時期にかかりました。長女は現地校に通ったため、言語のハンディで大変な苦勞をしましたが、大学受験前には日本の元の高校にもどりました。次男は長女たちが帰国後も約一年間上海の日本人学校に残り、私と二人っきりの上海生活を送り、高校から日本にもどりました。子供たち三人はそれぞれ大学卒業後、社会に出てから結婚し、子供が与えられています。子供や孫たちがイエス様を信じることができるようになることが、今私たち夫婦の祈り

の課題です。このことも私の両親家族に実現した「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒16・31)の聖書の約束を信じて祈っています。

(3)最近のこと

会社生活はほぼ一貫して中国関係の仕事で、総じて恵まれた環境でした。それでもサラリーマンの喜怒哀楽も味わい、煩わしい人間関係で悩むこともありましたが、家内の祈りによる支えや、集会で語られる福音メッセージ、兄弟たちとの交わり、聖書のみことばによって、その都度、逃れの道が与えられました。六十歳定年まで勤め、その後は約十年間、政府系独立行政法人で中国進出企業へのアドバイザー、更に府中刑務所で、収監されている中国人の通訳や手紙の翻訳の仕事をして、この五、六年は、来日した中国人小学生の日本語指導などを行ない、昨秋これも辞退し、完全フリーとなりました

た。これからはさらに主の役に立つことができればと願っています。

キリスト集会では、毎週日曜日、一般信徒が順番に聖書からメッセージを語ります。吉祥寺の他、約四十か所の地方の集会に、百人以上の兄弟たち、北は北海道、南は沖縄まで順番に出かけます。私も十数年前にこの当番に加わるように勧められ、当初は辞退しましたが、そんな時、家内がそつとメモ紙にみことばを書いて、書斎の机の上に置いてくれました。

あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。

(2テモテ2・15)

このみことばをイエス様から与えられたものと受け取り、今は、吉祥寺以外に、地方集会数か所の当番が三

6人の証し

Unser Herr lebt

か月に一度回ってきます。神学的なことは語れませんが、聖書から示された十字架の恵みをお話しするだけです。そのために、聖書を何度も祈りながら読むと、多くのことが示され、私自身が励まされます。商社現役時代は聖書を聞いても、義務的だったり、眠たくてみことは心に入って来ませんでした。今は時間がたっぷりあるので、三か月に一回は聖書全体を通読することを目標にしています。

最近、家内ともども年齢相応の老いを感じますが、大学時代以来の運動も続けて健康は守られ、集会の兄弟姉妹たちとの交わりもいただいています。これから先、不都合なこともイエス様から与えられるかも知れませんが、それも受け入れることができるようにと祈っています。

山田 渉（やまだわたる）
一九四九年福岡県生まれ、都立立川高等学校、東京外国語大学中国語学科、丸紅株式会社

妻 奈保子（なほこ）
長男 和都（かずと）、妻 きよ江（きよえ）、
孫 瑛都（えいと）、陽喜（はるき）
長女 品田 詩保子（しなだしほこ）、夫 啓（けい）、
孫 詩織（しおり）、律（りつ）
次男 信基（のぶき）、妻 心（こころ）、
孫 風（なぎ）

生ける神のしもべダニエル（2）

ゴットホルド・ベック

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

（ダニエル 6・10）

前回に引き続いてダニエル書6章を見てみたいと思います。ダニエルの信仰は確かに素晴らしいものです。聖書はダニエルについて良いことしか書いていません。欠点や弱さについては一言も触れていません。

大臣や太守たちは、国政についてダニエルを訴える口実を見つげようと努めたが、何の口実も欠点も見つけることができなかった。彼は忠実で、彼には何の怠慢も欠点も見つけられなかったからである。

（ダニエル 6・4）

彼の生き方の根拠になっているものは間違はなく主の約束であり、主のみことばでした。ダニエルは詩篇115篇（彼の時代より四百年前に書かれた）の非常に素晴らしい箇所を知っていたはずで

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなた

生ける神のしもべダニエル（2）

の恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。

なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞えず、鼻があってもかげない。手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。これを作る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。

(詩篇115・1～8)

ここに記されているように、偶像は耳が聞こえず、口もきけないので、いくら祈っても答えることはできません。けれども、私たちの神は生きておられこの方に信頼すると、守られ、導かれ、祝福されます。ダニエルは間違はなくこのみことばを毎日思い出し、「私の神は生きておられるお方だ」と証しし忠実に主なる神に仕えてい

たのです。

しかし、だからと言って、主なる神がダニエルに試練を与えられなかったと聖書は言っていない。絶望的な状態に置かれたことがあります。ダニエルは他の大臣たちに妬まれ憎まれて、獅子の穴に投げ込まれたのです。ダニエルは主の栄光だけを求めていたからこそ、このような辛いことを経験しなければなりませんでした。

ダニエル書6章1節から20節にあるように、彼の敵対者たちは王に嘆願し、三十日間、王以外の、神や人に祈り求める者は皆、ライオンの穴に投げ込まれるようにという法律を発令するよう迫りました。ダリヨス王はそれに同意し、大臣たちが用意した禁令の文書に取り消しができないよう署名をしました。

それを知って、ダニエルは神に祈ることを止めたのではなく、「いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた」(ダニエル6・10)のです。その結果、ダニエルは捕らわれ、獅子の穴に投げ込まれました。

その夜、獅子の穴でぐっすり寝たのはダニエルであり、命令を下した王は恐ろしい夜を過ごしたのです。王はそれまでダニエルの優れた能力を認め全国を治めさせようと思うほど信頼していましたが、彼のことが心配で不安で、一睡もできなかったのです。王は翌朝早く、ダニエルの入れられた穴の入り口に立って、悲痛な声で呼びかけました。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができましたか」。それに対するダニエルの返答は、本当に素晴らしい証しでした。

その夜、獅子の穴でぐっすり寝たのはダニエルであり、命令を下した王は恐ろしい夜を過ごしたのです。王はそれまでダニエルの優れた能力を認め全国を治めさせようと思うほど信頼していましたが、彼のことが心配で不安で、一睡もできなかったのです。王は翌朝早く、ダニエルの入れられた穴の入り口に立って、悲痛な声で呼びかけました。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができましたか」。それに対するダニエルの返答は、本当に素晴らしい証しでした。

私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。

(ダニエル6・22)

そして「ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認

生ける神のしもべダニエル(2)

められなかった。彼が神に信頼していたからである」(6・23)と記されています。

ダニエルは、「今まで神様に忠実に仕えてきたのに、獅子の穴に投げ込まれるなんてとんでもない。もう神に信頼することなどやめよう!」、という気持ちにはなりませんでした。「今こそ信頼し、主により頼もう」と信仰を堅くされたのです。詩篇97篇のみことばが彼の経験でした。

主を愛する者たちよ。悪を憎め。主は聖徒たちのいのちを守り、悪者どもの手から、彼らを救い出される。光は、正しい者のために、種のように蒔かれて^まいる。喜びは、心の直ぐな人のために。正しい者たち。主にあって喜べ。その聖なる御名に感謝せよ。

(詩篇97・10～12)

また新約時代のパウロも主に忠実に従った者でしたが、だからと言って、その伝道者生涯においてすべてが

順調だったわけではありません。コリント人への手紙第二には、「ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟」するほどの耐え難い苦しみに会いました。そして、「これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした」(2コリント1・9)と、苦しみに目的があること、さらに「神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してください」という望みを、私たちはこの神に置いているのです」(2コリント1・9、10)とその体験を書き記しています。

さて、ダニエルの神への信仰を目撃した当時のパビロン王、ダリヨスは全国に次のような命令を出すまでに変えられたのです。

そのとき、ダリヨス王は、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに次のように書き送った。

「あなたがたに平安が豊かにあるように。私は命令

する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」(ダニエル6・25～27)

異邦人の王が、主の力を体験的に知ったのです。

かつてイエス様は弟子たちに次のように言われました。「しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕えて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。それはあなたがたのあかしをする機会となります」(ルカ21・12、13)と。

つまり、弟子たちに「わたしを信じるとうまくいく。問題はないよ」ではなく、「忠実にわたしに仕えようと、とんでもないことになる。けれどもわたしはそのことが

起こることを許しているのだよ」。なぜなら「それはあなたがたのあかしをする機会となる」と言われたのです。

理解できない苦しみや悩みがある時こそ、証しするチャンスなのではないでしょうか。苦しみ、悩みながら主を仰ぎ見て主にすべてをゆだねるとき、安心して将来に向かうことができるのです。この態度こそが私たちのことばよりもずっと効果的な証しとなります。

迫害を受け続けた初代教会の信者たちに、ペテロは次のように書いたことがあります。「愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」(1ペテロ2・11、12)。

起こされるすべてのことの背後に主がおられるので

す。「主は偉大なるお方であり、主は万物を支配するお方である」。これこそがダニエルの確信でした。彼は自分をまったく主にゆだねていました。これが祝福された生活の秘訣だったので。

ダニエルの心には幼いときから主である神への畏れが満ちていました。主を畏れる心がなければ人間は盲目にされます。結局人間を恐れるようになり、人間によって束縛されるようになります。まことの神を畏れることは、異邦のものと妥協することを避ける勇氣と力をダニエルに与えたのです。

前回学んだようにダニエルは捕囚ほしゅうの地で、王が食べるのと同じで馳走ちしゅうやぶどう酒を提供されましたが、口にしようとしませんでした。偶像にささげたものだからです。彼はどんな時にも、主なる神の前に歩んだのであり、主だけを喜ばせようと切に望んでいたのです。主に對する服従にはすばらしい恵みが伴います。ダニエルとその友人たちは、王の提供したものを飲食したどの少年よりも健康であり、知恵と悟りにおいても何倍

も勝っていることがわかりました。(ダニエル1・15、20参照)

主に信頼する者は大いに祝福されるということが証明されたのです。

ダニエルのように主にいつも仕えるには確かに勇気が必要です。この勇気はどこから来るのでしょうか。祈りによって主と一つになることによってのみ、本当の勇気が生まれてきます。これをダニエルは経験したのです。ダニエルを捕虜としたこの世の王たちは次々と変わりましたが、彼は決して変わりませんでした。いつも主に仕えようと望んでいました。神の栄光を現わしていくことが、ダニエルのただ一つの目的でした。まことの神を礼拝するか、獅子の穴に投げ込まれるかというところに彼は立たされたのですが、彼は少しの妥協も見せないで、多くの迫害者に取り巻かれ、危険の真ん中にありながらまことの神に祈り続けたのです。「結果がどうなるか、それは私の責任ではない。私はただ従えば

よい。主は責任を取ってくださる」と、このような思いでダニエルは絶えず主に従ったのです。結果を少しも恐れないで自分自身を主にゆだねました。これこそがまことの幸せを得る秘訣です。いのちを懸けてすべてをささげ仕えていく価値のある神であると、心から主を崇めていましたから、ダニエルは主を裏切るよりは獅子の穴に投げ込まれたほうがマシだと思ったのです。彼の願いは絶えず主との交わりを持つこと、主と一つになることだけだったのです。

私たちはどうでしょうか。私たちにとって、主は、いのちをささげても悔いのないほど価値のあるお方となっているのでしょうか。信じる者はみな例外なく次のように証しすることができます。「私が罪人であったとき、まず主は私を愛してくださった。大いなる恵みとあわれみにより、私のわがままを赦された。主は私を絶望の穴から、堅い岩の上に救い出してくださいました」と。獅子の穴とは絶望の穴と言ってもいいでしょう。

イエス様が私たちのいものちとなっているかどうかは問題です。私たちはダニエルのようにひたすら主を愛し、主に仕えようと思っているでしょうか。私たちは自分の名誉や立場を考え、妥協してうまく通り抜けようとするのでしょうか、それともひたすらに主に仕えようとしているのでしょうか。イエス様のために苦しみにあうなら、それを喜びとするのでしょうか。主に絶えず仕えることは私たちの喜びだと、心から言い表わすのを主は待っておられます。

初代教会の信者たちはどうだったでしょうか。ダニエル書が書かれているのは、彼らにも励ましが必要だったからではないでしょうか。ダニエルの神は、救う神、解放する神、あらゆる心配から完全に解放することができると。ペテロも彼らを次のように励ますことができたのです。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさ

い。神があなたがたのことを心配してくださいからです。身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるしのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立つて、この悪魔に立ち向かいなさい。

ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全に、強く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。どうか、神のご支配が世々限りなくありますように。アーメン。

(1ペテロ5・7～11)

ダニエルの神はダニエルを獅子の穴から救うことができる神です。ダニエルの神は今日でもなお、私たちひとりひとりを「獅子の穴」から、絶望の穴から救うことができるお方です。目に見える獅子が私たちを襲うこ

とはあまりないかも知れませんが、目に見えない、ほえたける獅子である悪魔は私たちを取り巻き、襲つて来ます。ダニエルが一晚一緒にいた獅子は、「張子はりこの虎とら」ではなかったのです。生きた猛獣でした。この私たちを取り巻く悪魔の攻撃、試み、戦いは架空のものではありません。単なる想像ではなく、恐るべき現実です。

ダビデの経験したことが詩篇57篇の中に書かれています。「私は、獅子の中にいます。私は、人の子らをむさぼり食う者の中で横になつています。彼らの齒は、槍と矢、彼らの舌は鋭い剣です」(4節)。このダビデもダニエルと同

あるいはあなたの職場は、「獅子の穴」のようかもしれません。もしあなたがダニエルのように妥協せず、常に職場にあつても主に仕えて行くなら大いに祝福されます。主は生きておられるお方であり、この主に頼ると、主の栄光を知ることができ、拝することができのです。

生ける神のしもべダニエル（2）

もしかすると、あなたの家族は「獅子の穴」のようか
もれません。あなたは家にいるとイエス様の名のゆ
えに、平和がなく居づらいかもしれません。イエス様は
そういうことをはつきりと預言してくださいました。

あなたがたのことを心配してくださるから」と教えています。神にゆだねると奇蹟を経験するようになります。心配することによって得るものは一つありません。喜びのふのは悪魔だけです。

キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によることばをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。

礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

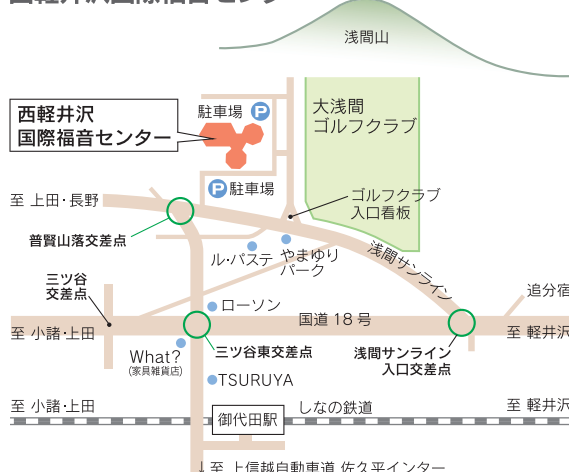
家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。

快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ —私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の实在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる 第68号

定価100円（税込み）2026年7月12日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力 芳我幸雄 福留伸子
写真	鈴木力 芳我幸雄
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ webmaster@christ-shukai.net

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。

本証し集でよく使われる言葉は以下のような意味です。

「兄弟姉妹」

イエス・キリストを救い主と信じる者は神の家族であり、尊敬と親しみを込めて、男性には「兄弟」、女性には「姉妹」と付けて、互いに呼びかわしております。

神のみことを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。（マルコ3・35）

「交わり」

イエス・キリストを救い主と信じる者たちが、聖書のみことばを土台に、ささえ合い、励まし合うことを言います。

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。（1ヨハネ1・3）